

---

# ルーン魔術師の夜

がりゅ～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルーン魔術師の夜

### 【Nコード】

N7807Q

### 【作者名】

がりゅ

### 【あらすじ】

旧称

文字を刻む魔術師の異世界物語

はい、こんばんわ

異世界に飛ばされてしまった文刻龍です。

この物語は魔術が主です。

以下の言葉から、物語を察しやがれ！！

「この国を壊す気だ」

「これが…恋」

「おっと、お嬢さん、俺に触れるとビリビリしますよ?」

「一人でも俺は戦う!」

「…お前が…」

「終焉は一瞬だ。眼をとじろ」

お気に入り登録や感想・評価などが俺の力となる!!

輝け!俺の右腕よ!

## 設定 紹介

主人公は男 名は文刻ふみくく 龍りゅう

性格はお人好しで現実主義者

魔術師

かといって、それほど魔術が使えるわけじゃない。

一点集中型、習得した魔術の種類は、ルーン文字と治癒魔術  
治癒魔術はそこまで強いわけではないが、ルーン文字は体内に魔力  
を循環させている魔術師にも外から刻むことが出来る

燃やすルーンレイヴァンテインの場合、対象が燃えるまで消えない、全てを焼き尽く  
す原初の炎並の炎が発動される

原初の記録はだれもが全員持つている、その人の人生の意味。

原初の記録は外に働かけるものと内に働かけるものの二つがある

彼の原初の記録は「殺せない者」

殺せない者の保護の効果は、内にある物は殺せない  
かといって、人を殺せない訳ではない

あくまで、効果は自分自身にしか利かない

それは、魔術も例外ではなく、生まれながら死ぬ普通の魔術は一切  
使えない

そのため、文字と共に生き永らえるルーンと、生かすことが出来る  
治癒魔術だけは習得できた

原初の記録は人それぞれで、中には壊す者や作る者、燃やす者等の  
始まりを持つ人もいる

世界の住人の殆どは原初の記録の存在を知らない

原初の記録を認識した人は、その始まりの記録に保護される

原初の記録を破ることが出来るのは、ヒトでは絶対無理  
それを破ることが出来るのは神に他ならない

魔術が余り使えないため、白兵戦が主

武器は細身の剣を二振り所持

サブ兵装として概念を付与した短刀を5本所持

概念は「死なす」の概念が三本、「生かす」の概念が二本  
その他、ルーンを刻んだ石を数個所持

彼の師匠はルーンの始祖と謳われた凄腕の魔術師  
名を論道威風ろんどういふう

義を重んじ、悪を嘲る性格

彼の本気の一撃は街一つを文字通り、無くすことが出来る。

## 第一話 物語を刻む物語（前書き）

感想、評価は俺の血肉となります  
どうかよろしく!!

## 第一話 物語を刻む物語

「う」

なんだ？この耳障りな音は・・・それに、誰だ？この声

「みくゆう!!」

・・・うるさいな。

しかも、視界がおぼろげだ・・・霧がかかってるみたいだ。

俺は・・・今は何歳だ？・・・12歳だ

今何をしていた？・・・！そうだ！師匠と魔術の訓練をしていたんだ！！

「文刻龍！！催眠の魔術の抵抗をしろと言っただろう？簡単に墮ちては駄目だろう！」

ああ、そうだそうだ。論道師匠うんどうしの魔術抵抗の訓練をしていたんだ。また失敗だ、これで何回目だ？

周囲をキョロキョロ見回す

いつもの怪しげな薬品や道具が並んでいる論道師匠の部屋だ。

？おかしいな。なんか、本物の剣があつたような・・・

それを論道師匠に聞くと、儀式用の剣とのことで。

そんな話はどうでもいい、と論道師匠は手をパンツと叩く

「うーん・・・君はやっぱ、魔術抵抗が弱いようだね。抵抗がでない、記憶を覗かれたり、今のうちに簡単に正気を奪われるよ？」

「そうか・・・なんか改善出来るものってあるか？」

「敬語を使いなさいって・・・まあいい。後で考えておくから大丈夫だ。」

じゃあ、宿題の成果を見せてもらおうかな・・・ファイア炎弾を放ってみてくれ」

師匠に言われて思い出す。

昨日、宿題が出てたんだ・・・たしか、基本的な魔術の行使とその理論を考えて来い。

みたいなことを言われた気がするが・・・気にしたら負けだろ

「すまん師匠。忘れた」

「うん。知ってる。だから今言っただよ？宿題はちゃんとやって来ないと駄目だろう？」

「・・・はい」

「そうだね・・・じゃあ、一番適性があつた・・・というか、攻撃魔術ではこれしか使えないルーンでも刻んでもらおうかな？・・・一応、僕もルーン専攻だからね？生半可なルーンじゃお眼鏡に敵わないとおもえよ？」

師匠がそういった瞬間、自分でも分かるぐらい、笑顔が顔に浮かぶというのも両親が死んでから、知り合いの論道家に預かれ、魔術を修めようとして三年・・・基本的な理論を学び、魔術の適正を調べたのが1年前・・・そして、才能が一切無いと告げられたのも、一年前

幸い、論道師匠は「魔術を知り、連綿と受け継いでくれる人であれ

ば、才能の有無は関係ないよ？生憎、僕は魔術に誇りを持つ馬鹿な老人とは違う。才能がないからと、家から放り出す真似をする訳ないじゃないか」

と言ってくれたため、この家に住み続け、魔術の知識を学んでいる。そして、戯れに、師匠の炎のルーンを見様見真似で刻んだところ、大火事が発生して大惨事になった

その一件以来、ルーンに適性があると判明、暇があれば、石等に刻んで訓練している

そういった経緯があり、ルーンと聞くと勝手に笑顔が浮かぶのになにせ、自分の存在意義がこの家で出来たきっかけがルーンなのだから

気を取り戻して、周囲に何か刻むものが有るか探す

ルーンを刻む素材によって魔術の威力が上がるのは勿論、消費量も格段に下がる

不純物が多ければ多いほど、威力は下がり、消費量もあがる

逆に、不純物が少なければ、その逆になる

特に、宝石は不純物の多い少ない関係なしに、魔力が込めやすいので、ルーン魔術師は宝石を好む傾向にある

師匠は宝石を嫌い、そこら辺にあるモノで魔術を発動させる

師匠曰く「宝石に刻むのに慣れてしまったら、宝石がなくなつたときどうするのんだ？僕はそういう事が嫌いだから難しい物に刻むんだ」とのこと

しばらくキョロキョロしていると師匠が口を開く

「何を探しているんだ？ああ！言ってなかったね。今回は大気に刻んでくれ」

はい？

師匠の言ってることが全く分からないぜ？

きつと言い間違いだろう

そう信じ続けた少年の希望は、斜め上どころか爆発した  
何だその顔？と言わんばかりに師匠の表情が変わる

「君はもう素人ルーン魔術師の域を越えている。今度は玄人ルーン  
魔術師の域に挑戦するんだ。進歩のない学問なんて、かんだガムに  
も劣るよ」

「と言われても、何をどうすればいいのか全く分からないんだが」

「考えなさい。又は敬語が使えるようになったら教えてやる」

・・・ふむ

後者は論外だから考えるか

「君はそこまで敬語が嫌いか？それともなんだ、僕が尊敬に値しない  
人物と思っているのかい？」

師匠の後ろにバチバチツと何かが光る

怒っている証みたいなき感じだが、その恐怖は並じゃない

師匠の背中には自分で刻んだルーンがあり、その効力は全盛期の師  
匠のルーンを上回る強さらしい

そのルーンの意味は「増幅」と「雷」

背中のルーンを一度全力開放したらしいが、街一つ、文字通り跡形  
もなかったらしい

・・・はて？誰に説明してるんだ？俺は

まあ、今は自分に降り注ぐ危機を回避しなければならぬ訳で  
必至に指先に魔力を込め、防御のルーンを無意識に宙に刻んだ

瞬間、師匠の怒りは嘘のように鳴りを潜め、笑みを浮かべた

「うん、合格だ。やっぱりやれば出来るじゃないか」

あの怒りはどうやら嘘だったようだが、殺気の量は半端ではなかった

・・・あれが、魔術師

現実に打ちのめされ、目の前に何故かケイタツキーのカーニャロサ  
ンダースの顔が浮かんでいると

どうやらそのカーニャロサンダースは師匠の顔だったらしい

「なんだ？そんなカーニャロサンダースみたいなアホ面して」

ふむ、俺の口はどうやら思ったことを口に出す真面目な口らしいっ  
て、おわっ！！

何故だろう？

さっきの一時、雷が俺の顔に向かって飛んできたとき、美しいツイ  
ンテールで黒髪のうちかり魔術師が浮かんだ・・・ああ、これが、  
走馬灯！

と思いに浸ってる間にまたもや次の一撃が師匠の方から飛んでくる  
その一撃一撃が必殺の一撃であり、それが師匠の本気度を物語って  
いた。

「君は！（バシュッ！）どうして！（キューーン）師匠をうらやま  
ない！！（チュドーン！）」

一発当たったけどどうやらギャグ補正で死ななかったらしい・・・  
おっと、意識が・・・・・・・・

朦朧とする意識の中で、学んだことを頭の中で呟いた

（・・・不用意な言葉は・・・危険）

ドサリッ

そうして、一日の修行が終わりを告げた

事件発生まで、後3日

## 第一話 物語を刻む物語（後書き）

師匠は歴代最強のルーン魔術師の異名を持っています

カーニャロサンダースはカーネルサン ースです

黒髪ツインテールでうっかり魔術師は・・・あれですよ、あれ

では、こちらへんでノシ

2 / 17 訂正を少し

## 第二話 魔眼を刻む物語（前書き）

はろー！

評価・感想、待ってるんで！

今の俺なら！きつと！厳しい言葉も受け止められる！

では、次の小説をどうぞ！

## 第二話 魔眼を刻む物語

side 龍

おはようございます。こんにちわ。こんばんわ。

貴方の街の変態紳士、文刻龍です。

さて、何故こんな事をいつてるのかというと、まあ、ご想像のとおり、絶賛逃走中です

誰からって？決まってるだろ。

師匠だよ

ハルバードを縦横無尽に振り回して俺の後ろに爆撃跡を作ってます

(ドゴオンー！)(バキヤアー！)(チュドーンー！)

俺の右手には前回言った儀式用の剣

儀式用だからって馬鹿にしてはいけない。耐久性は勿論、切れ味も  
実戦に使えるレベルに達している

効果は抗魔力と防御力の上昇だが、全く意味を成さない  
その為逃げまわってるんだが

「龍！逃げまわってちゃ、訓練に成らないだろうー！」

「いいえ、逃げなくちゃ死にます」

「ええい！ああ言えばこう言うな、君は！・・・全く・・・氷よ」  
スリサズ

「って！なに氷のルーンを刻んでるんだよ！！殺す気（ヒュオツ！）  
（サクツ！）満々だった！！絶望した！師匠の非情さに絶望した！」

「黙れ！・・・この訓練はあくまで戦闘の訓練だよ？相手が魔術師なのに魔術を使わないわけがないだろう？ほら、剣を構えろ」

「くそ！こうなったら仕方がない・・・防御・・・忍耐・・・この戦は勝利に終わる！！」

戦闘用の基本的なルーンを三つ刻んで剣を構える。

師匠も自身の背中のルーンを起動し、戦闘態勢に入る

かれこれ、魔術の才能がないと言われてからずっと剣の修業をしていたんだ・・・そう簡単に負けるわけがない  
そして、もう一つの隠し玉があるんだから！

「炎よ、嵐よ、集いて変化せよ。その形は剣。その輝きで闇を払え、炎の剣よっ！！」

手順は簡単、炎のルーンと風が巻き起こる嵐のルーンで基本骨子を固定し、変化のルーンで剣に形状を変える。

これが結構難しいんだよ。まじで。  
師匠もやってる姿を見ていないから、俺が最初のルーンで剣を作った男だろうな

ほら、師匠も目をこすってる。

・・・ニヤリッ 今がチャンスなり！

ダッ！！

互いの間合いは10メートル前後、その距離を魔術の補助なしでわずか3足で詰めたのは彼の身体能力の高さを物語っている

師匠も両手にあるハルバードを迎撃の構えでじっと待つ

ハルバードはどんなに筋力があるうと、竿状武器の欠点として、突いて引いたところには必ず隙ができる。

故に師匠の戦法は二つ

圧倒的な火力で道を切り開くか

相手の一撃を粉碎し、カウンターで片をつけるか

此処での選択は間違いなく後者だった

彼もそこには既に気付いている。

故に最初に生半可な一撃では殺られると判断し、最大火力を持って炎の剣を振り抜く

単純であるがゆえに、正しく最強の一撃

師匠もその脅威に漸く気付く

一漸く《・・・》気付いたのであった

そこから取れる方法はただ一つ

ハルバードを盾にしながら、

足で防御のルーンを刻むことだった

刻んだ瞬間、摂氏5000度の一撃がハルバードを溶かす

そのまま横殴りの一撃は防御のルーンなど無かったかのように振り抜かれ、師匠の体を斬り裂くはずだった

師匠ほどの魔術師が、簡単に後手に回る訳がない

直感的に導かれたのはエオル隠密のルーン  
そこから導きだされたのは・・・

「後ろだ!」

振り向きながら儀式用の剣を一閃する  
が、それを読まれていたのか、彼の前から、師匠の一撃が放たれた  
ハルバードの重さをもってして  
かくして、午前の訓練は終了となった

・・・やっぱり負けた・・・のか・・・

「午後の授業は、楽しい楽しい人体実験だよ?」

なんか聞こえたような気がする・・・

はい、どうもひさしぶり、貴方の家の無駄飯食らい、龍です

早速ですが、昼飯を食ってる間にこんな事言われたんですよ

「君の目を改造するね」

って、あれれ？楽しいラジオの時間じゃなかったのかな？かな？  
現実逃避もいい加減にやめたほうがいいんじゃないのかな？かな？

・・・というわけだね、絶賛逃走中ですが・・・あれ？この頃アニメのOP走る場面多くね？と思ったのは内緒だZE  
こう、走りながらも足で門のルー<sup>ン</sup>を刻んで魔術的障壁を作って師匠の足止めをしています・・・余り持たないみたいで  
そろそろ御用になりそうだぜ？どうするんだ？おれ？・・・  
続きませんよ

と、馬鹿やってると目の前に師匠があらわれる  
く！こんなところで支障を出すわけには・・・

・・・寒いな、おい

「急に寒くなっただけで、君はなにか知らないかい？・・・つと目を改造って物理的じゃないぞ？僕はそろそろ旅に出ないといけないから、安全策として目に歪曲の魔眼でも入れようと思って」

「よし、さっさと手術をしようぜ。」

魔眼！ま！が！ん！しかも歪曲！M A G A R E ミ！！が出来  
るんだぜ？最高やつほーい！！

「テンション高いな、君は・・・まあいい、早く来るんだ。」

師匠に誘われ、ホイホイ着いて行くと

ハッテン場だった

「何を想像しているんだ？これはカモフラージュだよ。トイレに見せかけた、オーケイ？分かった？じゃあ行こう」

「・・・そ、そうか。わかった」

青年移動中

「さて、早速だけど、手術を開始しようかな？」

「師匠、疑問があるんだけど」

「黙れ、そこに寝ろ。」

「サーイエッサー」

「よし。じゃあ、始めるぞ」

俺が寝つ転がると師匠が手に魔力を込める

「大丈夫だよな？おい」

「ああ、大丈夫だ・・・ふむ、そうだな。魔眼の簡単な説明をして

あげよう」

「それが疑問だったんだよ」

「黙れ、説明するぞ」

「なんか扱い酷くねえか？おい」

師匠は器用に人差し指だけに魔力を込めると大気にルーンを刻む。  
その意味は成長<sup>ベルカナ</sup>。そして師匠は言葉を続ける

「魔眼の種類は大きく分けて5つ、今、魔眼を入れる歪曲、千里眼、念動力、石化、最後が・・・ある神様が持ってた、死」

「死？」

「ああ、神の領域の魔眼だ。・・・見たら殺せる魔眼。その神様を最後に発見されてはいないがね・・・ああ、僕では決して作ること  
は出来ないよ、神様じゃないからね」

「そっか・・・分かった。そうだ、魔眼って一つしか入れれないのか？」

師匠は背中の中のルーンを発動させ、魔術行使の状態に移る

「いや、そんな事はない。まあ、入れ過ぎると頭痛で死にそうになるがね、二つが限度かな」

「死にたくないから魔眼は今のところは一つでいいや・・・じゃあ、始めてくれ」

「そろそろ、敬語を使うことを覚えないとね。まあいい、始めるぞ」

キイイイイイイン

甲高い音と共に現れたのは

鋸だった

「あるえ？鋸って必要なのかい？ねえ、師匠。必要なのか!？」

「正直言つて要らない。己の欲に素直になるとぜんぜん気分が違うね」

鋸を放り捨てて師匠は言葉を発する

「魔眼の施術は簡単だ、詳しいことは言えないが、目にその魔眼の意味を刻むんだ」

そう言い放つと俺の意識が飛ぶ

「なあに、ちょっと痛いから眠らせたただけだ。直ぐ起きるぞ」

一言言つて欲しかったよ・・・師匠・・・

side 威風

やっと寝たか・・・魔術抵抗が弱いとはいえ、魔力量はケタ違いの量だな・・・まったく、君は何になるつもりだよ。

・・・さて、歪曲の魔眼を入れるんだったな・・・そうだ、もう一つアレを・・・

ピシッ

ふむ、やはり。僕の世界では難しいか・・・だが、ランクを下げてやれば・・・

side 龍

・・・気分は上々。なにせ、歪曲の魔眼が俺の目になったんだ！早速発動してみたが・・・あれは人にやっちゃいけない物だ・・・カーニャロ・サンダーズの上半身が5回転ぐらいて擦じ切れた人に殺したらどうなるかは自分で考えてみてね  
それに、何故か師匠はいつの間にか居なくなっていた

というか、視線が高いよーな気もしなくもないが、大方師匠が俺の背を高くしたんだろ。大して気にしないぜ

こついう不思議現象には慣れっこだぜ！明日になればきつと師匠も戻ってるからその時間いてみるか・・・

そうと決めたら、魔術の訓練をして寝よう！さあ、寝ようぜ！！

青年睡眠中

事件発生まで、あと二日

## 第二話 魔眼を刻む物語（後書き）

俺、評価が上がったら腹筋背筋100回やるんだ

### 第三話 流点を刻む物語（前書き）

時間が少しはやいかなー？と思いますぜよ

### 第三話 流点を刻む物語

side 龍

お早う御座います、私、龍と申します。  
先ほど起きましたが、不可解な点がありました。  
ダイジエストでお送りします

俺起きる。

眠気が取れないので洗面所で顔を洗う。

俺びっくり

何が言いたのか全く分からないよな。

俺の顔が、どう見たって大人としか思えない顔になってたんだよ！  
分かるかこの野郎！

ごほんっ！すいません、ちょっと気が動転したんだ。

とりあえず、これも師匠の仕業だと思うんで、気にしたら駄目だと思  
う

駄目！絶対！

・・・寝よう。

そうすればきっと、救われるのだ。

寝ようと部屋に戻ったらカーニャロ・サンダースが居たから挨拶切

った。

後悔はしていない。

・・・というか、カーニャロ・サンダースがこの頃動いてるとしか思えないんだけど。

事件発生まで、後一日

「刻め！風を！この手に握るのは氷の一撃！」

起きて早速、カーニャロ・サンダースが復活していたので腕試しついでにルーンを刻んだ

というか、こいつ生意気なことに体に魔力を通しているから生半可な一撃じゃ弾かれるんだよな・・・まあ、頑張れば遠くからルーンを刻むこともできるけど、余りそういう事はしたくない。

氷のルーンにより、カーニャロ・サンダースは服がズタズタに成り、その隙間からは無残な肌が見えていた。

プラスチック製だけだね

此処からはまたもダイジェストで送ろう  
決して手抜きではない。

というか、誰に話してるんだ？俺

ああ、遂に気が狂ったか！

まあ、それでも良いかも知れない。

物音ひとつしないだっ広い家の中を一人で住んでいるなんて、しかもそれが魔術を使う家系だなんて。

まあ、偶にカーニヤロ・サンダースに会うから寂しくはないけどさ。  
この前なんて額に赤くMって書いたピアロが出てきたよ。  
しかもハンバーガーくれたぜ。

本題からずれ過ぎたな、では、どうぞ

俺、魔術の訓練

終わったら昼飯

カーニヤロ・サンダースやピアロに出会う

戦闘のあと友情が芽生える

握手した後、魔眼やルーンでボロボロにして焼却

剣の訓練をし始める

またもなんか来る

相手になってくれるようなので戦う

色々あって焼却

疲れたので寝る

おー！いつつぐれいと！

……マジで気が狂ったみたいだ。

そろそろ死にたい。

・・・というか、この家電化製品あんまりないな。  
有るといえば冷蔵庫と洗濯機、あとオンボロテレビ位だ。  
はぁ、寝よう。

side out

side GOD

始まるぞ、始めよう

これが最初で最後の物語  
必ず成功させよう

君の記録は何が始まり？

ケケケケケケケ

ケタケタケタケタケタ

運命を変えることなんて出来ないよ

選択肢なんてない

当然、平行世界なんて存在しないよ  
在るが儘を受け入れろよ

楽になるぜ？

side out

## 事件発生当日

s i d e  
龍

「なんだよ・・・さっきの夢」

胸糞悪い夢だった。

あれは、神様なんてものじゃない。

神は、人に選択肢を与える存在。

迷える子羊に自由を与える存在だろう？

なのに、一つの道しか与えない存在なんて・・・それは神様なんかじゃない。

悪魔だ

だからあれはただの夢

気にしなくて良いんだ。・・・よし、忘れた

自分の記憶を弄ることなんて、魔術師でもそうはないけど、始めて記憶を弄った感覚は想像を良い方で裏切ってくれた頭がすっきりした感覚だ。

さあ、そのままの感覚で飯を食おう！  
わーいわーい。飯だ飯！

冷蔵庫を勢い良く開け、そこから幾つかの食材を取り出し、簡単な炒飯を作り、食い始める

ガツガツガツガツ！

少年（見かけは大人！）食事中

「あー、食った食った。もう俺大満足だコンチクショー。ていうか、一体何体カーニャロとドナドが居るんだこら」

食事中は行儀よく待っていたが食べた後に一息ついたらシャドーボクシングで挑発してきた

あーもう！畜生が！俺に挑発するなんざ、人形風情が・・・

「思い上がるなよっ！」

最初に向かってきた奴はハンバーガーをくれたピエロだった。それを隠し持っていた雷のルーンを刻んだ石ころを投げつけ、消滅させるそして太ももに仕込んでおいた、師匠直伝の術、「死」の概念を刻んだめっちゃ物騒な短刀を一本取り出し、カーニャロサンダーズに肉薄し、斬りつける

それと同時に短刀に魔力を通し、概念武装を発動させる

これの厄介なところが直接斬りつけ、短刀を介し魔力を通さなくては概念が発現しないという、使い勝手が悪い術式だ

なにはともあれ、術式は無事に発動し、人形の「死」という概念を発現し、ばらばらになり壊れて逝った

ばらばらになった残骸が音もなく消滅していくと同時に、彼は踵を返し、訓練所に向かった

「一応、訓練は終わったけどさ。」溜息を一つついて

「一対何処行ったんだ？あのバカ師匠は」

疑問を虚空に投げつける

勿論、答えなど返ってくるわけもなく、彼の言葉は虚空に消えた  
時刻は午後の6時半

飯を食おうと立ち上がるが、彼の目には衝撃的な景色を映していた

彼の格好は、この国では当たり前の格好だった。

いや、当たり前というか、不思議には思われない程度な服装だった昔、この国が紳士で埋め尽くされていたときの正装

タキシードだ

と、言うのも彼は正装をしなければいけない時と場所に行っていたからであって、素でこの服装を来てきたわけじゃない

なにはともあれ、それがあくまで裏路地で怪しげな魔術を扱っていないければの話であつたが

「ちっ！何処から湧いて出てくるんだ？そろそろ僕も切れるよ？」

まあ、周囲には人払いの結界と防音の結界を張つてあるから周囲の目は全くないと言ってもおかしくない

第一、草木も眠る丑三つ時に路地裏を歩いている奴がいたら見てみたい

彼は戦闘に集中しながら心の隙間で適当に考えていた

相手になっているのがこれまた奇怪な生き物とすら言えない何かであつた

それが潰しても、切り裂いても、全く減らないのだから堪ったもんじゃない

故に彼は本気の10分の3程出すことにした

「起きろ」

その一言で周囲が光りに包まれる  
そして

「告げる。この手に主神、オーディンの一撃を。  
その一撃で主神に仇なす者に正義の鉄槌を！！」

詠唱が終わった瞬間、光が路地裏に咲き誇る

人払いの結界と防音の結界がなければ、確実に周囲の人が起きて此方を見るような轟音と光が周囲を満たす

本来、

雷とは神の必殺の一撃であり、人が扱ってはいけないものである  
雷を人の身で扱うことは、必然に神を貶めることであるからだ

だが、その一撃は使えば正に、神の必殺の一撃であり、  
その光景は、周囲に神の御力を知らしめる一撃であった

閃光が周囲から引いていったときには奇怪な生物のような影は一つ  
もなく、

地面はその一撃の強さを誇るように、クレーターが出来ていた

ボソリと

彼は呟く

「この僕を襲撃するとは・・・一体どんな思惑があつてだ？・・・  
いや、まさか、そんなはずが」

彼の脳裏に最悪の光景が浮かぶ

その瞬間、彼は走りだす

踏みしめた大地は、日本の地ではなく

大英帝国

イギリスの倫敦の地を、しかと踏みつけ、走る

そして、勢い良く、

海に飛び込んだ

s i d e  
龍

「嘘だろ・・・おい」

彼は愕然としていた

彼の目に映っている景色は、凄惨の一言であった

冷蔵庫がひっくり返し、中身の野菜や肉は全滅  
あげくに、猫がそれを玩具として使っている状態であった

故に、彼は家を出た

死活問題くわくを解決するために

その足が踏みしめているのは間違いなく日本の地であり、  
師匠と同じように、その顔は焦燥感に狩られていた

その意味は大きく違ったが

### 第三話 流点を刻む物語（後書き）

感想・評価・訂正待ってます

あと、敵対する魔術師の考えを募集しています！

#### 第四話 決した運命を刻む物語（前書き）

どうも、がりゅーです

そろそろ名前をがりゅーにするか迷ってるがりゅーです

そろそろ、物語が動き始めます

ちょっと、前振りに時間をかけすぎたかと思えますw w

まだ、本編に入っていないというw

カメさんですいません

## 第四話 決した運命を刻む物語

side 龍

辺りは、既に8時半をとくに回っていた

彼が家を出たのが7時ほどだとしても、少々時間がかかり過ぎだ

まあ、それは仕様がなない筈だ

彼の家は人里離れた場所に建っている

しかも、彼の師匠である、論道威風もないのだ

彼の家の周りには、至る所に罾が仕掛けられていた

まあ、掻い摘んで言えば、師匠の弟子は希少で、ぶち殺してもその肉体が欲しいわけだ

だが、それは彼の勘違いであり、理由は他にあるのだが、彼は知る由もない

一步不用意に歩けば挽肉になる場所を抜けるのにかなりの時間と労力を要した龍は、ヘトヘトと成り、一步步くのものにも精一杯といった様相を示していた

しかも秋も深まり、夜になるととても寒いわけで

「・・・寒い・・・」

彼は疲労と寒さの中で買い物の帰り道をゆるりと歩いていた

既に、帰り道も半分を過ぎており、あとは彼の気力のみが支えるものになっていたわけだが  
その気力を奪うかのように、暗闇に慣れすぎた彼の目は見たくない景色を映した

目の前に広がるは

赤

整備されたコンクリートに咲く、赤い花は、少々雅に欠けるものだったが彼は、その景色に目を奪われていた

倒れているのは女性の一般人だ

その周りに血が飛び散っており、その量は、今から救急車呼び、治療を施しても間に合わない量ということを、魔術師である彼は冷静に判断していた

だが、今直ぐに治療を施せば、間に合う量であることでもあった

故に、魔術師は迷わなかった

全霊をかけ、目の前の一般人を救おうと、彼の二つ目の魔術を行使する

彼の両手が明るく光ると同時に、目の前の女性の傷が塞がり始める一般に、治癒魔術と呼ばれる物だった

魔術に才能がない彼の最後の神秘

そして、取り出したのは武骨な短刀

その概念は「生かす」

稚拙な治癒魔術の能力を補佐するように、概念は現界した

そして、その神秘は一つの命を助けた

s i d e 威風

ボコボコボコッ

彼が居るのは、既にイギリスではなかった  
日本の排他的経済水域の中  
詰まるところ、海の中である

まあ、本来ならば直ぐに警察にでも見つかるはずなのだが  
イギリスから此処迄、一切息継ぎをせずに此処迄来たから、彼は見  
つからなかったのだ

しかも、その速さはかなりの速度が出ている  
その速さを持って、彼は2時間余りで日本に帰ってきたのだ

(・・・まさか、診断結果がアレほどのものとは・・・)

考えるのは、彼の弟子である、文刻龍の原初の記録の診断結果  
その原初の記録は、彼の予想を遥かに上回るものだった

「殺せない者」

道理で、龍には全くと云っても過言ではないほど、攻撃魔術に才能がなかったわけだ

攻撃魔術とは、定義の上では、術者本人が創りだし、相手にそれを当て、それによる魔術術式の行使により、相手を攻撃するものだつまり、魔術という物を産み、生かしながら、殺しているのだ

故に、彼に攻撃魔術は使えなかった

だから、有り余る才能の全てが、文字と共に生き永らえるルーンに注ぎ込まれたのだ

（しかも、この診断結果は既に漏れているだろう。隠す側が倫敦塔だとしても・・・いや、倫敦塔だからか）

彼に意図の分からぬ襲撃があつたのは2時間前だが、今ならその意図がわかる

目的は、文刻龍だ

ルーンの始祖は水を掻く四肢に力を込める

現在時刻は9時ジャスト

弟子の身には、既に災厄が降りかかっていた

side out

ドゴーーーーンッ!!

耳をつんざくような轟音と共に髪の毛が少しつんつんになっている  
青年に雷が降り注いだ

この雷はどう見たって自然現象とは乖離したものであった  
それは、世界に働きかける、超常現象  
魔術だ

だが、受けた方も尋常ではなかった  
あれ程の威力、周りのコンクリートは決れているのにもかかわらず、  
青年は何もなかったかのように立っていた

「ちっ!・・・奇襲で・・・アレだけの威力だぞ!・・・なんで・・・  
・死なないんだよ!・・・くそっ!」

青年が振り向く中、術を行使した男は肩で息をしていた  
というのも、あの魔術は詠唱を第五節、魔法陣を現界させて、漸く  
発動できる大魔術だ

故に、魔力の消費も激しい訳である  
というか、魔力のバックアップを含めた、魔道具を使用して漸く発  
動できる魔力量なので、男は既に死に体であった

その男の直ぐ傍に、先ほど奇襲をされた青年が立っていた

「なんだ？お前・・・理由はなんだよ」

青年は問いかけた

疑問をありのままに、右手には儀式用の業物を手にして

「・・・はっ！・・・お前は、理解してないのかよ・・・一般人に魔術を行使している時点で、既に魔術協会から判決が下されたんだよ。文刻龍を、神秘の漏洩及び運命の過度の操作により、処罰を下す。つてな・・・しかも、ドアの絵がついてだよ・・・」

ピシッ！つと効果音が聞こえた気がした

・・・文刻龍は焦っていた

確かに、魔術師が一般人の運命を変えてはいけないのは定石であるが、これほど大事になるとは想像もしていなかった  
どんなに大きくなっても、倫敦に呼び出され、注意をされるぐらいだと思ってた

だが

（どついう事だよ・・・ドアの絵付きだと？しかも、総本山直々に処罰云々だと？絶対、裏があるな。

おそらくは・・・俺の魔術術式と、論道威風に対する交渉の為だな）

彼の師匠・・・論道威風は、魔術協会の再三の呼び寄せに応答せず。その姿を眩ましている人だ

おそらくは、論道威風に匹敵する魔術師は協会の中でも二人居るかないか・・・その内一人は協会の頂点に君臨している奴だ

よって、協会は喉から手が出るほど欲しがっているだろう

なにせ、聖堂教会の方から近々、全面戦争を仕掛けるぞ  
という意味のコールが掛かっている  
今直ぐにでも戦力が欲しい筈だ

そして、ドアの意味だが、おそらく

D e a d   o r   A l i v e

生死問わずだろう

此処に、彼の運命は決した

世界が滅ぶまで、彼は逃げる者になり、この世界から消え去らない  
限り、彼の死は不可避のものになった

## 第四話 決した運命を刻む物語（後書き）

感想・評価待ってまーす

## 第五話 動き始める歯車を刻む物語（前書き）

ちゃーす

がりゅーです

今回の話から、そろそろ事態が動きますので  
諦めずに見てやってください。

それが、圭一さんの願いDEATH！

## 第五話 動き始める齒車を刻む物語

side 龍

薄暗くなつた路地裏

その中に、無数の人影があつた

それは不良なんてものではなく、神秘を武器に戦つ、あらゆる常識から乖離した魔術師であつた

「うおおおおおおおおおおおお！！」

バキヤツ！

目の前に居るところの魔術師を殴り倒す

その勢いのまま、儀礼用の剣の峰で次に呆然と立っている魔術師の意識を刈り取る

二人の意識を刈り取つたら逃げる

何分、相手は百を超える魔術師だ

奇襲を仕掛ける事に徹するしかない

逃げる最中に、龍は足で門ソーンのルーンを刻み走り去る

かれこれ此の遣り取りを、数回繰り返しているが、相手は面白いように門に嵌る

その門の意義は通さないこと

嵌った相手は強力な攻撃魔術で門を壊すか、内部崩壊・・・つまり、術者自身を戦闘不能にしなくてはいけない故に、足止めには最適な魔術なんだが

（いくらドアが出たとしても来すぎだろ・・・いや、殺人願望を持つてる魔術師を呼び寄せる、という目的の上では大成功かも知れないけど）

路地裏から脱すると大通りに出る

だが、人どころか、車さえその影がなかった

（くそっ！人払いか！・・・待てよ？俺の身柄が欲しかったら、殺しちゃダメじゃねえか？・・・そういう事か畜生！倫敦塔はどうしても俺の身柄が欲しいみたいだな！おい）

彼が考えている間に、一人の人影が音もなく出てくる

だが、彼の考えは止まらない

（おそろくだが・・・ドアの絵はたくさんの魔術師を呼び寄せるため・・・そのたくさんの魔術師で、俺を襲わせ、消耗しきったところで、大本命！）

考えが纏まった所で、顔を上げた瞬間

轟！

大きな拳で殴り飛ばされた

side out

「くそ！家にはいなかったからな・・・確か冷蔵庫は荒れてたから・・・食材を求めて出かけたか！」

論道威風は遂に、三時間も掛からずに、イギリスから日本に帰ってくることに成功した

飛行機でイギリスに行くために、約七時間だから、その速さは大型ジェット機より速いことが証明された

（まさか、ドアの絵が出るとは思ってもいなかったが・・・そんなに僕を引き入れたいのか）

論道は顔を歪ませ、苦虫を噛み潰したような顔をした

それもそうだ、彼の目の前にはイギリスでも襲ってきた自立型ゴーレム

その数はイギリスの比ではない

（おそらくは、僕の消耗を狙ってるようだな・・・だが）

「僕を消耗させたいのなら！これの十倍はもってこい！！」

背中のルーンが煌き、右手のルーンが光りだす

「起きろ！右手は補助に！背中では攻撃！主神オーディンの一撃を受けよ！光り輝く神の槍！」  
グングニル

右手に宿った、神代の一撃は、音の存在すら許さず、すべてを消し去った

「全く・・・こんなゴーレムで僕を足止めに出来るわけがないだろ・  
アルファズル  
・・・万物の父よ」

残骸が残る山道を、音もなく走りだした

side  
龍

轟！

「ぐああああああ！！」

ドコッ！！

ノーバウンドで50m近く吹っ飛ばされる

身体強化、それに防御のルーンを刻んでもかなりのダメージが蓄積される

そして、彼を吹っ飛ばした奴の名を

ゴ  
ー  
レ  
ム

人ではない泥人形

その5 mはあるかという巨体を持って、文刻龍を粉碎しようと拳を振り上げる

「く、簡単に……死んでたまるかよ！」

その拳を紙一重で避け、前転の要領で避ける

だが、その拳の風圧で、幾つもの傷ができる

しかし、その傷を無視して文刻龍は詠唱を紡ぐ

それを阻止しようと、ゴーレムが拳を振り上げようとするが、肝心の拳は地面に埋まっている

「開け門よ。<sup>ソーン</sup>纏え、煉獄<sup>カフ</sup>。顕現するは、地獄の門！」

詠唱が完了した瞬間、ゴーレムが黒い炎に包まれた

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

人ならざる者は苦悶の叫びを上げた

その苦悶の叫びを意に介さないように、人影が路地裏から出てくる

「・・・ふむ、ルーンを組み合わせで地獄の門を開くと・・・なるほどなるほど、確かに、人ならざる者への一撃としては満点だな」

くせ毛の金髪を無理やり撫で付けたような髪型をした魔術師が話しかけてくる

（？こいつが・・・さっきのゴーレムの作成者か？となると属性は限られてくるな・・・）

「ふむ、名を名乗っていなかったな・・・万物の父、アルファズルと名乗っておこう」

満身創痍の青年が固まった

メドゥーサに睨まれたぐらい固まった

「なっ！万物の父だと！・・・そこまでして、俺の師匠を戦争に巻き込みたいのかよ」

万物の父

それは、あらゆる物質を凌駕した、物質を創り上げた人に贈られる

一二つ名<sup>セカンドネーム</sup>

例えば、論道威風にはルーンの始祖

そして、協会のトップの二つ名は片目の英雄など、人によって変わる名前だ

二つ名を持っている事＝最強ということだ

故に、二つ名を持っている人が二つ名を告げる場合、それは全力を

持つて相手をするということだ

「あまり、私もこういうことはしたくない。

此方に降りろ。すれば命は助ける」

その誘いは、甘い誘いだ

だが

「断る！俺が降りたら、師匠はおろか、たくさんの人が犠牲になる・  
・そんなの、許せない！」

青年は、きつぱりと、その誘いを一分の迷いも無しに、断った

「ふむ・・君のような青年は好ましいのだがな・・安心しろ。手  
足を折るだけだ」

その言葉を発した瞬間

後ろから、煉獄の門に閉じ込められていたゴーレムの拳が文刻龍目  
掛けて降り注いだ

side out

side 威風

ノンストップで走ること10分足らず  
最寄りのスーパーがある街に到着した  
周囲の喧騒が喧しい中

論道威風の足取りに迷いはなかった  
何かの確証が有るかのように、淀みなく、足をすすめる

そして、いつの間にか、車も、人もいない空間に入り込んだ

そこで、広がる光景は

二人の人影と、その後ろで、地獄の炎に焼き尽くされているゴーレムの姿があった

そして、一人の青年が大きく、叫んだ

「断る！俺が降りたら、師匠はおろか、たくさんの人が犠牲になる．．．そんなの、許せない！」

論道は、足をとめる

そして、感慨に耽った

（君は．．．既にそこ迄成長していたのか．．．ならば、最早言うことはないな）

そして、現実に戻った瞬間、ゴーレムが動き始める  
その動きを冷静に見ながら、彼は全霊を持って、ゴーレムを破壊し

に行く

（あのゴーレムは、アルファズルのゴーレムだ・・・ということは、間違いなく生半可な一撃じゃ防がれる。

だから・・・喜べ、アルファズル・・・君は、僕の全力を目の当たりにする）

「起きろ」

短い詠唱

その詠唱に反応するように、彼の体が余すことなく、光り始める顔も、両腕も、両足も、背中も、タキシードの上からでも光り輝いているのが分かる

「死ね。神の手以外で作られた泥人形が」

両手に集められた、法外な魔力が、真名開放とともに、放たれる！

「光り輝く——神の槍つ！！！」

周囲の結界をまるごと破壊し、大通りに沿って放たれた一撃は、そのままゴーレムに直撃し、一直線に進み続け、空を碎いた

コンクリートが抉られ、水道管が破裂し、煙が立ち込める中、歩く

そして

「やあ、アルファズル。

死ぬ覚悟は出来ているかい？」

死刑宣告を突きつけた

## 第五話 動き始める歯車を刻む物語（後書き）

感想評価、まってまする



## 第六話 親友の絆を刻む物語

轟！

ゴーレムの不意打ちの一撃は、その速度、そのタイミング共に文刻龍を殴殺することが出来る物だった

だが、ゴーレムの必殺の一撃は叶うことはなく

ゴーレムは、神代の一撃をともに喰らい跡形もなく消え去った

（ッ！！・・・あれ？俺はゴーレムに不意を打たれて死んだんじゃ・・・）

人間の防衛本能として、目を瞑り顔を隠したせいでゴーレムの消滅の瞬間を見ることは叶わなかった

が、それ以上に心待ちにしていた男の声が聞こえた

「やあ、アルファズル

死ぬ覚悟は出来ているかい？」

その声は、さっきまで満身創痍だった青年を復活させる魔法の言葉であり

敵対する者には心から震え上がらせる言葉でもあった

そして、その声の主は青年の前に立つ  
そして

「全く・・・君は一般人に魔術を使っではいけないと言ったはずだよ？どうして守らなかったんだ」

本日最初の青年への声は叱責だった

「いや・・・実は買い物行ったら人が死にかけてたから・・・つて！買い物袋どうした？俺？おい！どうしたんだよ！俺？」

最初は説明口調だったけど途中から自分に問いかけるような口調になっている青年は横目にルーンの始祖は考えを纏めようとした

（人が死にかけている？此処は一応大きな街のはずだ。人が死にかけていた場合大騒ぎになるはずだ・・・が、それがなかったということは・・・！）

タキシード姿で考え事をしている大人に対応したのは死んだはずのゴーレムの拳だった

ドゴォ！！

拳は狙い変わらずさっきまで考え事をしていた人に降り注いだ  
が、狙いは定まっていたが目標は逃げ去っていたようだった

「ふむ・・・流石だな・・・あの一撃は昔の君では避けられなかったはずだ

それは、過去の君が証明している」

ゴーレムが拳を振り下ろした姿の横にアルファズルと呼ばれる男が姿を表す

それと同時にゴーレムに刻まれた奇怪な紋様が光り輝く

「過去に囚われるような人間じゃないんでね・・・君もそうだったはずだが、何かあったのか？万物の父」

「ふむ、長く生きると物事の考え方が変わってくるのだよ？ルーンの始祖」

「そうか・・・それは残念だ」

「ふむ、そうだな、君も考えを変える機会を持つてみるといいな。物事が変わって見える」

ルーンの始祖はその言葉を見捨て、間合いを詰める  
その傍らを歩く青年の顔は決意に満ちた顔だった

それに相対するは万物の父  
その横を青年と同じようにゴーレムが付く

そして、ルーンの始祖がタキシードの上着を脱ぎ捨て、何処からともなくマントを引きずり出し肩につける

そして

「死ね。アルファズル」

「死ね。ロンドー」

互いに殺意を込めまくった一撃を相手に撃ち出す

そして、残された方も戦闘を始めようと思って動き始めると

ゴーレムが茶を啜っていた

「あー」

「■? ■■!」

ゴーレムが茶飲みを何処からか出して茶を注ぐ

そして、ジェスチャーをし始めた

(・・・どうやら飲めってことだよな・・・てかこのゴーレムさんは俺に炎で燃やされたことを恨んでないのか?というかれ絶対恨んでないな)

どう見たって敵意の欠片すらないゴーレムの姿に思わず毒気を抜かれる

そして、ついにちゃぶ台の傍に座り、出された茶を啜る

(・・・美味い・・・)

頬が緩む

そして隣にいるゴーレムを見ると自分と同じように頬?を緩ませ?戦闘を眺めている

しばし、此の余韻に浸っていたと思う青年とゴーレムの図は中々にシニールであった



「往生際が悪いな、君は」

右手から放たれた一撃は牽制の意味を込めた一撃  
・・・だが、牽制の一撃は狙いを外れ街角の一つの車に当たる

その瞬間、車が爆発すらしないで消え去った

「ふむ、往生際が悪いのではなく往生する際が見当たらないので死にゆくことはしないだけと言ってほしいな」

「黙れ、君は僕の弟子を手に掛けて、僕を戦火に巻き込むつもりだろっ!」

その言葉が放たれた瞬間、アルファズルの動きが止まる

「ふむ、君は・・・いや、君の弟子共々何を言っている？戦争に巻き込む？まさか・・・そういう事か！タイムオルタ時間操作！」

アルファズルが右手に宿らせた土の槍を地面に突き刺す

「ふむ・・・ロンドー、フミコクを連れて逃げる。

魔術師だったら、私が止める」

「「なにっ!？」」

「ふむ、聞こえなかったか?これは私の意思だ。どうやら、私は踊らされていたようだな・・・行け、時間操作がタイムオルタこの事態を嗅ぎつけてやってくるまで、そう時間は掛からない」

アルファズルは路地裏からタイミング良く飛び出してきた100人単位の魔術師に地面に刺しておいた槍を投げつけ

「ふむ、八割は止める。君は、私の親友だからな。」

「彼は十年は会っていなかったからな。

そのゴーレムは壊すなよ?親友とも言えない友達関係を壊すつもりはない」

友情の欠片を横目に見ながら、龍が疑問をぶつける

「どういう事だよ?アルファズルは敵じゃなかったのか?」

事態を読めていない弟子に絶望したような声を師匠が上げる

「君は馬鹿か、アルファズルは騙されていたんだよ。協会の頂点トップであり、僕とアルファズルと同じ学び舎で時を過ごした

タイムオルタ  
時間操作にな・・・ああ、この名は余り知られてないな。  
ブレイグ ヒーロー  
片目の英雄にだよ」

「ふむ、確かに私はブレイグヒーローに「ロンドー」の弟子が人を殺した。君の手で彼の弟子を始末してやれ、それが親友を汚名に被らせない唯一の方法じゃないか？」と言われた」

「ああ！ダンスしてたのか！」

「君は一回死ね。」

ゴーレムと茶を啜っているから馬鹿になったんだ  
もう一度言っぞ、君は一回死ね」

「ふむ、喧嘩をしている場合ではないのか？バカ二人組  
さっさと行け」

アルファズルは不満そうな顔で吐き捨てる

「恩に着るぞ」

その不満そうな顔をスルーして、彼はいい顔でその言葉を吐き捨てた

「知らん、恩を返したければ生きて私の前に立て」

そして、親友達は別れた

一人は笑って

一人は仏頂面で

そして、三人の間を分かつかのように、ゴーレムの拳が突き刺さる

その余波を受け、コンクリートはめくり上がる

そして、巨人は言葉もなく、走りだす  
万物を凌駕する物質で作られた巨人は  
その身に数多の魔術を受けながら、百人を超える魔術師に肉薄する

「■■■■■■■■■■ ツ！！！！」

一つの拳で、魔術師が何人も吹き飛ばす  
巨人の咆哮を背に受けて、魔術師の叫びを無視して、二人の男はその場を立ち去る

「行くぞ！龍！僕に追いつけるようにしろよ！？」

「師匠こそ！着いて来れるか！？」

「「殺つてやろうじゃないかっ！！」」

## 第六話 親友の絆を刻む物語（後書き）

評価・感想待ってます！

あと、グングニルは論道の代名詞です

アーサー王のエクスカリバー位、有名な代名詞です

グングニルって何？って魔術師に聞いたら、最初に言われるのがロンドーの武器

って言われるぐらい有名です

## 第七話 友人との敵対を刻む物語（前書き）

なんか出して欲しい名剣や武器がありましたら、是非感想でも活動報告のところで言ってください

即座に書きます

書かせてくださいお願いします

## 第七話 友人との敵対を刻む物語

「くそっ！八割どころか五割押さえてないんじゃないのか？あのアルファズルが！」

「愚痴言つてないで走れ！って逃げたところでなんか策でも有るのか！？無いんだったらこれも無駄じゃないか！」

街並みは半壊している路地裏の中、既に住民は危険察知をしてなのか、はたまた集団催眠の術式にかかったのかは知らないが、パニックが起きる様子はない

その不気味な静寂を消すかのように、幾つもの魔術が放たれ、外れて家に当たり、音を轟かせる

既に、アルファズルと別れて一時間は経っていた  
その一時間をずっと走り続けている中、ルーンの始祖は息を切らせずに喋る

「それについては大丈夫だ。

此処に来る道中に術式を張っておいた

とりあえず、地球の裏側にでも行ってもらうことになるが・・・まあ、あそこの地域は魔術は栄えていない。

しばらくは安泰だと思ってくれよ」

結構衝撃的なことをサラリと述べる

だが、その衝撃的な発言を言われたのにも関わらず、何処か達観した表情でつんつん髪の青年は言葉を発する

「まあ、そうだとは思ってたから驚かないけどさ。  
じゃあ、とりあえずここにいる魔術師を排除するってことで」

そう言っつて、いつの間にか出てきた魔術師を見回す

「君は師匠の面目を潰すつもりか？この程度の数だったら余裕だよ」

そこで一度言葉を区切り、足を踏み鳴らす

「驚け、馬鹿共が。」

君達は魔術の秘技を目の当たりにするぞ

グレゴリオの聖歌隊よ

潰せ」

グオンツ！

その音共に、ルーンの始祖は嗤う

両儀には法外な魔力を込めた魔力弾を浮かべ

四象には複雑な魔方陣を刻み

八卦には終焉の歌を歌う人形を置いて

そして、その悉くが



その最凶の一撃を放った張本人は澄まし顔で、自分の弟子にそう言い放った

2

「ふむ、魔術術式の構成が甘い。

そして・・・どうやら北欧の魔術のようだが・・・生憎、北欧の魔術は見飽きた

結論から言うと、君は二流魔術師が精一杯だといったところか」

そう指摘しながら相手の腹を土の槍で貫く

ゴバツ！

これで既に108人目

彼の周りには死体の山が出来ていた

その山の大きさを、余計に大きくする化物が居た

名をゴーレム

正真正銘の化物だ

[illegible]

拳の一振りで、相手の魔術師の五臓六腑が潰れ、数十人が一斉に吹っ飛ぶ

あの文刻龍の戦闘は手を抜いていたかのように  
その戦闘力の高さを魅せつけるように  
咆哮を街中に轟かせ

巨人は主に敵対する全てを粉碎し、突き進む

「ふむ、君の魔術は宝石魔術か・・・おや、何処かで見たと思えば、金髪ドリルは見覚えがある  
指導の時間だ」

何人も屠り、そして相変わらず、魔術の指摘をしている魔術師に底は見えなかった

それは、自分自身も感じていた事でもあり、敵対する魔術師がほぼ全員感じていたことだった

たった一人の魔術師を除いては、だが

「固有時間、操作」

その言葉が紡がれた瞬間に、喧騒が止む

「この術式に、始まりは無い」

そして、声の主が言葉を続ける

「この術式の理論といえば、私が学生時代にふと思った《時間とは、大元の時間はあるが、それと別に、自分にも時間があるのではないか?》といった、素朴な疑問だったさ」

そう、素朴な疑問だ

例えば、授業中。

好きな教科と嫌いな教科では、時間の進みが違うだろう

例えば、休憩中

寝っ転がっている時と勉強している時とでは、時間の速さが違うだろう

その疑問を魔術にただけ

正真正銘のオリジナル魔術

《個人の時間を大元の時間に投影する》魔術を完成させた人外な魔術師

その代償として、片目を失っただけ

片目で、魔術師の領分を超えた領域に片足を突っ込んだ

「故に、ブレイグヒーローと言われるようになったか・・・ふむ、確かに魔術師から見れば英雄だろうが・・・初心忘れべからずといった言葉を知っているか？」

君は既に初心を忘れているよ。  
フルンデイン」

「知るか。

ただ、初心という重りを投げ捨てなければ、到達できなかった領域  
だったただけだ

お前は、いつまでも初心という荷物を抱えているから、この場所ま  
で来れないんだよ」

「ふむ、毒舌というのには甘すぎる  
優しい性格だというには辛すぎる

君はずいぶんと中途半端だな」

「ちっ！ 馴れ合いをするつもりはない！」

顔を怒りに歪ませた片目の青年が右手に魔力弾を宿らせ、詠唱を紡  
いだ

「時間操作・・・君の時間は早過ぎる」

瞬間、光も音も、目の前の景色も2倍速に成ったかの錯覚にとらわ  
れる

・・・否

本当に2倍になっているのだ

「二倍速の魔力弾を避けてみるよ？」

二倍速と視認した魔力弾を

アルファズルは

余裕そうな表情で弾く

「ふむ・・・遅いな。

君の魔術・・・いや、魔法のほうが生温いんじゃないか？」

「それこそが思い上がりだ・・・

アルファズル、君の負けだよ」

そう言い放つフルンディンの左手には、ナニカが握られていた

「ふむ、その礼装は・・・

ツ！！君は！」

アルファズルが顔を驚愕に歪ませた瞬間

赤色の光が辺りを照らし、ゴバツ！！という音と共に、アルファズルを何かが襲った

「よし、此処で止まれ。  
術式を発動する」

そう言って、男は一步踏み出し、意味不明な言葉を短く、小さく呟いた

その言葉が終わりを告げた瞬間、彼の足元に無数の魔法陣が出現する

「なあ、師匠はどうするつも」

青年の言葉は終わりまで言われることはなかった

驚愕に表情を変える青年の首筋には、男の手刀が打ち込まれていた

「君は少し五月蠅いからね。  
この魔法陣の中で眠っておけ、起きたときにはブラジルだ

・ ・ ・ ・ ・ やあ、フルンディン  
殺りあうのか？」

男は、青年を魔法陣の中に置いてから、立ち上がる  
右手にはいつの間に出したのか、巨大なハルバードが  
目には殺意を滾らせて  
宿敵でもあり、友人でもあった男を迎える

## 第七話 友人との敵対を刻む物語（後書き）

ヒーハーツ！

そろそろ異世界に吹っ飛ばさないと読者に怒られるぜ！

きつと

てか！

ギャグが！

ギャグがないよ！

ギャグ入るって宣言したのに！

ごペンなさい

## ここらでちょっと登場人物紹介2

アルファズル

属性

土・水

礼装・霊装

ゴーレム

口癖

「ふむ~~~~~」

髪型

金髪

右に流してワックスかなんかで押さえつけている

魔術の腕は時計塔の中でもトップスリーに入る

時計塔の中で、唯一まともと言われていた男

ロンドー・アルファズル・フルンディンと言えば、魔術師は畏敬の念を送る程の人物達

フルンディン

属性

無・有

礼装・霊装

フルンディング

現存する名剣の中でもかなりの名剣

その特徴は魔力を込めれば込めるほど、切れ味が上がる異質な剣  
刀身は赤い

彼の属性は極めて稀である無と有の混合属性

時計塔の中で、一番頭が逝かれているといわれた男

彼の得意魔術は時間制御

大本にある時間と個人の時間の速度を変えることができる魔法

魔術の段階を超え、魔法の域に行こうとしたとき、代償として片目  
を持っていかれた

グレイルロッド

属性 炎

魔術師である

専売特許は炎にまつわる礼装・霊装の行使、それにもなっ  
て起き

る現象を把握し、行使できる  
炎の魔術は一流

解説だが、彼自身、魔術は嫌いであるが、彼の息子は魔術を至高の物と考え、万象は魔術で操作できると思っている  
彼の息子はこの小説の鍵となる人物

エドモンド（忠臣蔵）

属性 中立・中庸

礼装・霊装  
ひえんりゅうぶとう  
飛燕流舞刀

霊装の能力は動体視力の強化と筋肉の限界を一時的に解除する物  
彼自身は霊装の能力には気付いていない

昔出会った極東の島国生まれの戦士と死合ってから口調がこうなった  
剣の腕前は龍を凌駕する  
主には絶対忠誠を誓っており、主の為ならばなんでもする偉い子  
近衛部隊隊長も担う御方

ついでにだが、文刻龍がダイブしてきた時、城まで引つ張ってきた  
人は忠臣蔵とは別人だ

フリアグネス

属性 肉体・筋肉

礼装・霊装

無し

武器は己の拳と足

手と足が届く範囲が彼の間合い

そして、馬鹿である

筋肉を褒められると何があっても嬉しがる

大事なこともなのもう一度いう

馬鹿

ユースティツア

属性 肉体・骨格

礼装・霊装

背後から刺す刃  
キリングナイフ

キリングナイフ

背後から刺す刃は異世界の中で存在する礼装

付与能力として敏捷とナイフの戦闘経験を一部憑依させる珍しい礼装  
このナイフはユースティツアの家系の中で代々受け継がれてきた物  
で、切れ味が鈍ることは決して無いと言われるナイフ

尋常じゃない速度はこのナイフの効果によって出来る芸当

## ここらでちょっと登場人物紹介2（後書き）

ちよつとミスって七話を二回投稿しちゃったんでその場凌ぎの登場人物紹介です

随時更新します

3 / 2 更新

第八話 弟子を異世界に吹っ飛ばす時を刻む物語（前書き）

異世界にふつとヴァース！！

覚悟しろ！（主に作者の根性に呼びかける声）

## 第八話 弟子を異世界に吹っ飛ばす時を刻む物語

街中の喧騒から遠く離れた場所

その山中に、甲高い金属音が響く

その音は剣戟の音

その音を奏でるのは、かつて同じ学び舎で学んだ二人

名を論道威風とフルンデイン

時計塔の神童と呼ばれ、歴代最強の魔術師と魔法使い

そして、本来剣とは無縁の筈な魔術師と魔法使いは、ハルバードと長剣を振り回す

「うおおおおおー!!」

「はああああー!!」

キンッ!!

ハルバードの斧の部分と長剣の刀身が切り結ぶ

「おい！君に質問があるんだがつ！」

言葉を発しながら切り結ぶ体勢から引き技に持っていく体勢に移行し、頭に斬りかかると見せかけて胴体をハルバードの柄の部分で殴ろうとする

そのハルバードの一撃を避けながら、フルンディンはその言葉に応じる

「何故！君は文刻龍を襲撃するように命じた！

僕を戦場に引っ張って行きたいのなら！（ガッ！）僕に話をつけてくるだろう！（キイン！）

確かに、僕に対する牽制としての意味は持つだろう！（グオン！）だが、関係は悪化するだけだろう！それも分からず君は策を実行したわけではあるまいに！（ドガア！）」

一連の言葉と同時に放たれた一撃は、どれも森林を破壊し、地球温暖化を推進する行為にしかなかった

「簡単な話だ」

一撃でも当たれば即死の攻撃の悉くを避け、舞のように距離を取るブレイグヒーローは言葉を続ける

「君の弟子は危険過ぎる。

アレのせいで聖堂教会と戦争に発展したぐらいだ。

故に、俺は行動を始めた。

奴を異世界に飛ばすためにな」

その言葉が発せられた瞬間、論道威風の顔は憤怒の表情が貼りつけられた

「貴様……それだけの理由で文刻を襲ったのかっ!!」

「おかしいとは思わんのか？」

何故、フミコクの前に死にかけの人が居た？

普通ではありえないことだろう。

何故、魔術を行使してからほんの10分で魔術師が襲撃した？  
普通では考えられないことだろう。

何故、フミコクを今、俺は一人にしている？

これだけには答えがある

お前の転移魔法に邪魔をさせてもらった。

座標は、かの宝石翁が漏らした秘中の秘の座標だ

お前の弟子は終わりだ」

時が止まる

比喻ではない、本当に時が止まる

その時が止まっている中、言葉が周囲に響く

「普通の人ではこの状況ではパニックを起こしている。

しかも、お前はフミコクを溺愛しているとの情報もある

お前、何を企んでいるんだ？」

その声色は疑惑の色



そうそう。

聖堂教会との戦争が、何故こんなに早くなったと思う？

たかが魔術師一人のせいで魔術界が揺れるような事をしでかすとも？

確かに、戦争は始まる寸前だった。

天秤の振れ幅は左右ギリギリだった・・・だが、それぐらいでは左右には振れない

君が想像しているよりもずっと深刻な状況だよ？

文刻龍は、神様さえ睨めば殺せるよ

最初っから、君はキングー人だったってわけだ  
後の全ては僕の駒だ

じゃあな、親友」

論道威風の顔が、貼りつけたような笑顔に変わる  
ニタリツと

不気味に、半月を描いて

**第八話 弟子を異世界に吹っ飛ばす時を刻む物語（後書き）**

感想・評価待ってます

## 第九話 異世界で絶体絶命の時を刻む物語（前書き）

駄文でスイマセン！

## 第九話 異世界で絶体絶命の時を刻む物語

「わふー」

「わふふー」

「わふふ？わふふふわふふふ！」

「わふー」

魔術の妨害が見られました  
逆算して術式の理論の解体を開始します

「ア、アアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

空中千メートルをパラシュート無しでダイブしている青年の名を文刻龍という

彼の表情は既にパニック寸前のそれであった

（やばっ！ブラジル上空からダイブとか、めっちゃ目立つよな。絶対目立つよな！どうすんだよ！俺！）↑此处をブラジルと勘違いしている青年IN異世界

そして、約40秒の地獄が終わりを告げる

ドゴッ！

簡潔に、音はそれだけ

周囲で買い物していた人も

可愛い女の人をナンパしていた人も

街中で腕立て伏せをしていた人も

全員、静まり返る

煙がもくもくと上がる中、人影がムクリツと起き上がる

「あーやべ、ブラジルだから言葉通じないのかな？

そうすると俺どうするんだろ？俺野垂れ死にすんのかな？」

「「「「「.....」」」」」

「あーくそ、どうすんだよ俺！

ってか、ブラジルって何だ？甲冑とか着ている人がいるぞ！  
まさか・・・聖堂教会の回し者か！くそ！手が早いな！！」

急に目付きが鋭くなって構える空から降ってきた変人を見る町人の  
目は、既に警戒度数MAXだった

（エマージェンシー・エマージェンシー。  
敵は強大だ。COOLに決める！）

町人の一人が心のなかで呟いた

その中で、甲冑を着た人達が文刻龍を取り囲む

「貴様！そこを動くな！一体何者だ！！」

甲冑を着た人（以降甲冑さんとする）の一人が脅迫まがいの問答を  
する

その問答に答ええないまま、文刻龍は考える

（あれ？言葉わかるじゃん！てか、これってアレだよな。

俺不審者だよな。

この甲冑さんが出てきた瞬間、町民が安心したような空気を滲ませ  
たのから鑑みると、衛兵みたいな者だと思っのが打倒だけど・・・  
ここは答えるか）

「俺の名前は、文刻龍  
日本から来た旅人だ」

何故魔術師と名乗らなかつたのかというと、勿論、神秘を漏洩させる事はしないつもりだったし、聖堂教会の回し者だったら尚更魔術師なんて言えないからだ

そんな彼の心境を知ってか知らずか、彼に烙印を押す

「貴様を一度捕まえる。」

ついて来い、王の慧眼にて有罪かを決めるぞ」

「え？なにその暴政、王の一言で罪決めるのかよ！」

「そんな言葉は我等が王の前に立つたら言えなくなるぞ？」

ずるずると引きずられながら、青年は己の不幸を嘆いた

「立て！王の御前であるぞ！」

「何だその古き良き江戸の言葉は！もうちょっとブラジルっぽくない」

「なんだそのエドやらブラジルやらは！王よ！こやつは頭が逝かれていますようですよ！」

「なんだその可哀想な子認定を王様の前ですんなよ！俺が不憫じゃないか！」

馬鹿な事をやっている和王様が痺れを切らしたように口を開く

「自己紹介から始めよう。

俺の名前はグレイル・ロッド

炎の国、グリンロッド国の王だ。

お前の名前は？」

「文刻龍だ

・・・ってブラジルじゃないのかよ！此処どこだよ！」

「騒がしいぞ！王の御前であるぞ！」

「五月蠅い！この古き良き忠臣蔵！家族に看取られて笑顔で死ね！」

「？ありがとう」

「・・・ギャグも終わったところだし、そろそろ空中ダイブの拳句、俺の国に無断入国してきた理由を簡潔に言ってもらおうか？」

緊張した空気が辺りを包む中、ポツリと言葉が発せられた  
その言葉の真意を理解しないまま、グレイルは耳を傾けた

「・・・その言葉を発した本人は、双眸をぎらつかせ、王の威厳を醸し出していた」

王は椅子から飛び降り、文刻龍を睨む  
その中で、忠臣蔵が動く

「文刻龍・・・貴様、主を侮辱しているのか！」

「いいえ、セデスです」

「何がだ！せですってなんだ！」

「・・・お前らいいかげんにしろよ？」

この空気に耐えられなくなったのか、王がもうどこでもいーやみた  
いな顔で文刻龍に言葉を促す  
そうして、王の睨みというか、忠臣蔵の睨みに耐えられなくなった  
龍は口を開く

「俺、魔術師っす」

「だからどーしたっ！！」

「あと、この世界の住人じゃないっす」

「だからど・・・おお？まあ、確かに」

「あとはもりすぎっす」

「はもりってなん・・・おお？まあ、確かに」

「これやめない？」

「「イエスッ！」」

## 閑話休題

気不味い空気を噛み締めた後、苦虫を噛み潰したように王が口を開く

「お前がこの世界の住人でもなく、魔術師ということも分かった。だが、お前はその後どうするんだ？」

その質問は危機感が全くない青年の心に突き刺さる

・・・が、世界を知らない青年は、世界を甘く見ていた

「頑張ら（スパンツ！）痛てえ！」

世間知らずの青年の後頭部が、忠臣蔵（本名をエドモンドという）の手のひらに叩かれる

「貴様は馬鹿か！路銀もない旅人が生き残る事などあり得ぬ。

王は貴様を心配しているのだぞ！」

「そつだそつだ！と、言う訳で、俺のところで暫らく働け。

仕事内容は・・・この国の周囲に出てくる魔物の討伐、その他諸々だ。

精精「拒否権は？」有るっちゃあるが、拒否したら此处で首を斬る」

「暴君だ！なんて出鱈目！一回死（チャキツ！）スイマセンでした」

かくも世間とは厳しいことに今更ながら気づいた青年は打ち拉がれたその青年の肩をポンポンと叩くのは忠臣蔵であつた

「王は聡明だ。

貴様は見たと所武芸に通じていることもご存知だ。  
私が家などは用意するから、頑張ってくれ」

その親切さに、青年は嵌つた  
厳しさに打ち拉がれていた人に優しい言葉  
最早言うことはなかった

既に、青年の心は忠臣蔵に掴まれていた

そう、忠臣蔵は信じていた

（甘いよ、忠臣蔵。

師匠の甘言に比べたら、こんなの大便を我慢していた時、急に扉が開いて「先にどうぞ？」と言われたのにも劣る  
まあ、この優しさに甘んじておくか）

そう腹黒い脳内会話を繰り返しているとグレイルが口を開く

「まあ、一応この場は無罪と言うことだ。  
こいつを連れていけ」

またもや忠臣蔵に引きずられながら城を後にした龍は、城門から放り捨てられ、ボロ雑巾になりつつ、街に向かった

既に、夕日が沈む時であった

**第九話 異世界で絶体絶命の時を刻む物語（後書き）**

感想評価待ってます

## 第十話 グリンロッドの忠臣蔵は化物か！という感想を刻む物語

ざわざわっ

ざわざわざわっ

ボロ雑巾に成りつつ、忠臣蔵<sup>エトマント</sup>の好意により、家を手に入れた文刻龍は、はらずると、夕陽が沈む街を体を引きずって歩いていた。周囲の町人から疑惑の視線を集めながら。

今此处で、龍の衣服を見直すと、少々視線を集めるのに十分な理由であつた。

この国では見ないズボンにボロボロに成つたマント。親に見捨てられたような格好で街を歩いていけば、皆が見る理由では十分な理由であつた。

第一、この国では親が子を捨てることなんてまず無い。理由としては幾つかあるが、最たるものとしては、働く場所が無いなんて事はなく、たとえ家庭が貧乏であつても、子を捨てる概念すら無いのだ。

まあ、疑惑の視線の理由は城からボロ雑巾で出てきたからだ。

その視線を徹底的に無視をして、青年は街を歩く。

少し歩いた後、右手に繁盛して居る店があった  
どうやら飲食店の様だが、旨そうな匂いがぶんぶんする  
その入口で客引きをしている女の人

奥には客が沢山いるような雰囲気醸し出している  
その旨そうな匂いに誘われてスツと体を店に近づけた

瞬間。

客引きをしている女性の首筋にナイフが突き付けられた

上で言ったように、子を捨てる概念はない  
だが、貧富の差はあるのだ

貧富の差はやがて劣等感と成り、時に犯罪を犯す人が出てくる  
どうやら看板娘にナイフを突きつけたのもそうだった成り行きから  
だろう

そうなる并要求するものは金だ

周囲から人が消えて行く中、店の中から店主が出てくる

その光景をじっと、青年は見つめた

(……………あれって、強盗じゃねえか？いや、きっと看板娘の可愛  
さに嫉妬してナイフを突きつけてただけだろ。

……ってソツチの方がヤベエじゃねえか！ふざけやがって……絶対  
助ける！)

心のなかで指針を決めると瞳は揺るがなくなった  
右手は念のため腰の儀礼用の剣に触れて、周囲から人が居なくなっ

ていく中、そつと近づいていく

悲鳴は聞こえない

悲鳴をあげたら男を刺激すると心得ているからか、はたまた恐怖で声が出ないだけか

別にどっちでもいい、そう思って距離を詰める

やがて、店主の声も聞こえてくる

「すみません！どうか、そいつだけは離してください！お願いします！す！」

店主の声は懇願の声であった

その声を踏み躪るように、下衆の声が聞こえる

「こいつがそんなに大事か？だったら、速く百万ペリオンを持ってこい！」

此処に来て、ペリオンとは何だ？と考えた龍はその考えを振り払うが考えが頭にまとわりつく

百万ペリオンなんてどう聞いたって大金とは思えない

そして、その予感は的中した

「ですから！百万ペリオンなんてそんな大金は有りません！どうか、10万ペリオンでそいつを離してください！」

「ねえんだつたら仕方がねえな！その代わり、こいつは貰おうか。上玉のようだし、売れば百万ペリオンはいきそうだ」

その言葉が発せられた瞬間、女性の顔に恐怖の表情が貼りつく

そして、その言葉をしかと耳に入れ、女性の表情を見て、青年は地面を蹴る

（確かに、生活が苦しくなって追い詰められているかも知れない）

徐々に速さは増していき、それに比例をして距離も近くなる

その距離は既に5m

男もその弾丸の速さで近づく青年に気付いたようだ

だが、

（それでも……人を盾にして、金を奪うなんてことは許されない！！）

右手を握る

儀礼用の剣には手を出さなかった

油断や慢心ではなく、女性に血を見せてはいけないという、何処か不思議な根拠からだ

そして、青年は気付く

（魔眼があつた！！）と

考えと同時に、目が赤く、青く、七色にひかる

走りながら、三次元で修正された眼の一撃は狙い変わらずナイフを握った男の右手首に命中した

グチユリッ！

「があああああああああっ！！」

手首を人体の構造上曲げれない方向に螺子曲がった右手を真上に上げ、男は苦悶の叫びを上げた

そして、男の手首を粉碎した際に、目を瞑っていた女性と男の間にスルリと入り込む

「お前は、少し反省しやがれっ！！」

そして、右の拳は勢い良く、男の顎にめり込んだ

2

程なくして、衛兵が勢い良く走ってくる

そして、男を引きずりながら城に戻っていく光景を横目で見ながら、頭をかく

感謝の印に飯を食べていってくれと、熱烈歓迎の意を周囲にばらまきながら店に入れようとする妙齡の店主と、さっき人質にされていた女性の熱意にどうしたものかと思いつながら

結局、結果からして龍は折れた  
熱意に負けたわけではない

決して、食欲に負けたわけでもない  
決してだ

だが、青年は思う

（食欲は人として当然のことだよな。

だったら、食欲を満たすということは人として活動していることだ。  
ここで、飯を断ったら人じゃないってことだ。  
だから、食う）

よく分からない言い訳を空に向けて発した後、店の中に入る

店の内装は良かったと言っておこう

そして、飯を食って一息付いた頃、さっきの女性が此方に向かって  
やってくる

「さっきは本当にありがとうございました！お礼と言ってはなんです  
が、質問には何でも答えますよ？貴方はこの国の出身ではないよ  
うなので、疑問はたくさんあるでしょう？」

その言葉は有りがなかった

昼頃にこの国にダイブした後、この国の常識も分からなかったとこ  
ろだ

此方としてはありがたい

そう結論を付けるとさっさと話をするに限る

「じゃあ、最初。

ペリオンって何？」

「ペリオンはこの国の硬貨です。

価値としては、1ペリオンでお菓子一つ。

100ペリオンで安い剣が買えるぐらいですか」

「ふーん。

じゃあ、次の質問。

この国は簡潔に言うとなってる？」

「治安が乱れていますね。

王もそれには危惧を抱いているようで、この頃治安を乱す輩を行動に移す前に逮捕する事が出来るようにしました。

まあ、そのせいで少しでも怪しいことをすると逮捕されるようになってしまいました……それでも、前よりは良くなったんではないでしょうか」

「アレが危惧を抱いているのか？

…おっと、じゃあ、最後

君は魔術師か？」

店内は相変わらず賑やかだ

誰もが俺らを見ていない

誰一人、注意を向ける奴も居ない

「……そうです。

私は魔術師です」

「この状況でこのタイミング……俺になんか用か？」

「エドモンド様から言伝を……家は南に有る。  
家についたらまずは鼠を殺せ。

そして、夜になったら町の外に出るだそうです」

「雇われたけど普通は最初休ませるもんじゃないのか？  
まあいいや、さっきの女性はどうしたんだ？」

徐々に顔が剥がれる

女性の麗しき顔は剥がれ、中からは男の顔が出てきた

「アレについては問題有りませんよ？  
少し眠ってもらっているだけです。

じゃあ、私は此処で……と名前がまだでしたね

ユースティツアと呼んでください」

そういうと、男は去ってゆく

喧騒の中に消えて行く背中をじっと見ていると、いつしかさっきの  
女性が復活しているようだった

周囲の結界も消えている

どうもやり辛いと思いながら、店を後にしようとする

入り口の扉に手をかけ、外に出た瞬間

「おかーさん、あのひとつで変態だよね？」

「しっ！さっき女性を救っていたから変態ではないはずよ？」

町人の警戒レベルの下がり幅は予想以上に低かったことに驚いてそそくさとその場を後にした

(……………俺って、なんかやっ たっけ?)

青年は首をかしげながら、道を歩く

少し歩いたところで新築同然の木製の家飛び込み、鼠を駆除する

もうすぐ夜だ

月が笑っているように、弧を描く

第十話 グリンロッドの忠臣蔵は化物か！という感想を刻む物語（後書き）

作者が未熟故に忘れていたことを一つ訂正します

宝石翁についてです

名をキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ

またの名をカレイドスコープ

魔法使いであり、第二魔法の使い手

平行世界に自由に行き来できる魔法を持っている

## 第十一話 初めての仕事を遂行する時を刻む物語

街の出口は一つしかない

という訳でさっさと出てきたわけだが…

街の外に出ると、其処には数人の人影が見えた

まあ、協力者だろう

そう思っ歩いていくと

「よう！お前が文刻龍だな！俺の名前はフリアグネスだ！よろしく頼むぜ！」

熱血万歳で髪の毛も燃えるような赤色の男がこっち向いて挨拶してくる

それをスルーしてさっき話しかけてきた男に向き直る

「お前がユースティツアだな？でなんなんだ？」

後ろで挨拶を無視されたことによる心のダメージを転がってカバーしている馬鹿を放っておいてユースティツアに話しかける

「ええ、早速呼び出して申し訳ありません。

ここから北に10km位行った所に魔物が巢食っている場所がありますので、そいつら全員殺してきてください」

「お前らは来るのか？正直言ってユースティツアは強そうに見えないんだけど」

「それなら大丈夫だ！」

なんか筋肉達磨が来た

「ユースティツアは最強の蜘蛛といわれている男だ！」

そう言っただけでキラッと歯を輝かせたフリアグネスをまたしても無視してユースティツアの方を見ると

「そこの筋肉馬鹿がほざいているだけです。気にしないで下さい」

「それは分かるけど。

何で蜘蛛なんだ？」

「スパイダー」

その言葉がフリアグネスの口から紡がれた瞬間。

俺は己の脚で地をしかと踏みしめ、己の右拳を勢いよくフリアグネスの腹にぶち込む

「ハンブラビ法典！！」

奇妙な呻き声をあげてものすごい速さで遠くに飛んでゆく

それを見送った後、俺とユースティツアで飛んでった方向（北）に向かつて拝んでから、走り出す

時刻は真夜中、走りの速さは既に人外の早さであった

少し走るとさつき吹っ飛ばしたフリアグネスらしき人物が地面に刺さっているのを見つけた  
ルーンを刻んで水をかけてあげたら復活した

（魔物が巢食っているって言ったけど……こいつら着いて来る理由がないか？）

隣を余裕そうな表情で並走しているユースティツアの漆黒の髪の毛を横目に考える

どうせ、監視だろ

そう結論付けて走る速度を上げる

そして道中の3分の2を過ぎたところで、筋肉達磨が口を開く

「あんたはこの世界の住人じゃないみたいだから教えてやる。

あんたの世界の魔物がどれぐらいの強さだか分からないから詳しいことはいえないが、この世界の魔物は頭が良いぞ。

少なくとも、馬鹿な魔物は少ない、頭がいい奴だと集団戦の統率をする奴らや、人の言葉を理解する奴がいるぞ

その言葉にぞっとする

それは即ち、素人では魔物の一匹すら撃退することが厳しいと言っ

ている様なものだ

龍の驚愕を無視してこいつは言葉を続ける

「だから俺らが居る。

この世界の魔物に戦いなれている俺らがな。  
きーつけるよ？」

少なくとも、冗談では無さそうだ

場合によっては魔物が街を襲い、街を作って防衛している所もあるらしい

そんなこんなで、巢食っている場所に着く

一つの集落のような場所だ

崖を背にしてあり、其処からも頭が良い事が充分理解できる

だが、二人の戦士は飄々としていた

「文刻は右から攻めろ。俺は中央だ……で、逃げ道を作っておいて、逃げたところをお前が追撃だ。」

簡単に作戦を立てると行動は迅速だった

フリアグネスは己の鍛え上げた肉体と拳を武器にして戦う近接戦闘者  
ユースティツアは死角からの一撃で即死を狙う暗殺者

国の中でも強者の中に数えられる人が二人居る布陣の中で、一人だけ、懸念している事があった  
それは…

（ギャグ足りなくなね？絶対足りないだろ。どうする？どうする？俺！）

そこに、天の声が舞い降りた

「龍。

何を思いつめているのかは知らないけどよ。

俺に出来ることだったら何だってやってやるぜ！」

キラッと齒が輝く中、二人の友情が深まった  
そして文刻龍は、決意した

「じゃあ、筋肉筋肉〜って言ってくれ！」

「OK！そろ筋肉筋肉〜！筋肉筋肉〜」

涙目で懇願する龍の頼みを聞いて、頼んでもいないのに振り付けをして筋肉とシャウトする馬鹿（IN異世界）

「じゃあ、ユースティツア。行こうぜ！」

「そうですね。あの馬鹿は放っておきましょう」

「ちょい待て！俺を馬鹿って言っただな！お前…どうなるのかわかるよな！！」

ぶんぶん腕を振り回してユースティツアに近寄る中、ユースティツアは言葉を発する

「っ！貴方……筋肉凄いですね？」

その言葉に反応して、ぴたりと止まる

「本当か！いやゝお前も見る目があるな！」

るんると急に態度を変えて踊りだす馬鹿をまた放っておいて歩き出す

「おい！無視すんなよ！」

まあ、そうすると追いついてくるのが筋肉達磨クオリティなので

「おお！筋肉達磨じゃないか！」

「誰が筋肉DARUMAだと！」

「おっと！お前……その筋肉िकासじゃねえか！」

「そうか？ありがとよ……って話を逸らすな！テメエ……俺をおちよくってんな？」

「おいおいまじかよ……お前の筋肉、カッコ良すぎるぜ！」

「本当か！ありがとよ」

「おう、本当のことを言っただけだ」

「馬鹿な遣り取りはやめてください。」

読者が飽きます」

「読者って誰だ!」

「それは神代の神秘」

「ユースティツアのキャラが壊れたぞ!」

「ついでにゴブリンが出てきましたよ」

「なんだと!」

「君たちに贈る言葉があるよ。」

馬鹿」

「知ってるわ!」

「さて、僕は奴らの後ろに回ります。  
貴方達で頑張って殲滅してください」

「作戦の意味がねえ!」

「君たちは息がぴったりですね。おめでとつございます」

「うれしくねえ!」

「■■■■■■■■■■ー!」

遊んでいるうちに既にゴブリンは三人から10メートルの場所に移

動していた

そして、後列のゴブリン約6匹が弓を持ち出し、矢を放った  
いつの間にか横に並んでいるフリアグネスが口を開ける

「ゴブリンって頭がいいんだな」

「お前戦い慣れているんじゃないのかよ!!」

戦闘の火蓋は馬鹿の一言で切って落とされた

第十一話 初めての仕事を遂行する時を刻む物語（後書き）

ギャグを入れてみました

感想・評価まっています

## 第十二話 異形の魔物と激突する時を刻む物語

周囲に漏れる明かりの源は異形の魔物が起こした火に寄る物だった  
その中で、異形の魔物…ゴブリンと対峙する三人の人影が見えた  
一人は弓を放つゴブリンの背中にナイフを突き立てる長身の紳士らしき人

二人目は棍棒を振り上げて仲間を援護しようとするゴブリンの頭骨を拳で叩き割る筋肉ムキムキの脳筋

最後に両刃の剣でゴブリンを袈裟で斬りつけるツンツン髪の青年  
その三人が、およそ50の魔物を相手に立ち回っていた

そのなかで、

「ええい！フリアグネス！君に決めた！！」

「ウゴオオオオオオオ！！」

何処その可愛げのある動物を使役する人物の台詞をパクってフリアグネスに突撃をさせるバカ二人が居た。

脳筋馬鹿が腕を振り回し、守ろうとする棍棒ごと叩き折っている  
その粉碎玉砕大喝采の活躍を見せている馬鹿が残したゴブリンを殲滅にかかる龍だが、やはり頭がいい。

ゴブリンは龍を見ると周囲に残っていたゴブリンを呼んでフォーメーションを組む。

……それに龍は見覚えがあった。

「これはまさか！！バミューダトライアングルかつ！！」

そう。三匹のゴブリンが神代の神秘を作り上げる

だが、ギャグでもなんでもなく、これは危険なものだ  
何処でそのやり方を知ったのか、それは今は関係ない。

最早、彼の警戒レベルは熟練の魔術師と相手する程になっていた。

三匹のゴブリンが三角形を作っているとき、魔術的な効力をもって  
龍に重圧をかける

その重圧の正体はゴブリンの持つ棍棒だ

唯の棍棒が龍に重圧を与えられるわけが無い

だが、与えられる仕組みがあるから、現象が起きる

そして、その秘密は三位一体による魔力の循環と術的效果のある三  
角形形のフォーメーション<sup>がた</sup>

要するに、バミューダトライアングルの効果：対象の思いを強化す  
る魔術を三位一体の構造で魔力を節約して使っているのだ

唯でさえ力の強いゴブリンに、「こいつを殺す」という思いを強化  
するのだ。

その手段としての全てに強化がかかる

故に、頭脳も、武器も全てが並外れた物になる

正直言つて、戦士としての奴らの相手をするのは厳しい

故に、龍は戦士としてではなく、魔術師としての戦闘を開始する

その最初の行動は

「術式の解体を始める…構造は三位一体、神代の女王の「<sup>バミューダトライアングル</sup>三角形の  
術式と解析、ならば手段はひとつ。

三位一体の構造をぶち壊す！」

決めたなら行動は速く

一番前に構える二匹のゴブリンのうち、右側にいるゴブリンに肉薄する

危機感からか、ゴブリンも棍棒を振り上げる

それと同時に後ろにいるゴブリンが龍の右側に入り込み、三方向からの攻撃に転化する

（ちっ！やっぱり、こいつらは頭がいい！）

慣れぬ集団戦に歯噛みしつつ、一度後ろに下がる  
その足が、奇妙に動く

だが、頭が良くとも一連の動作に隠された真意は汲みきれぬ筈がない  
想像通り、追撃をしようと足を一歩踏み出した瞬間、龍の口から詠唱が発せられた

「<sup>ソーン</sup>門のルーン、<sup>カ</sup>火のルーン、意味するは<sup>ゲヘナ</sup>地獄の<sup>ゲート</sup>門っ！！  
その炎で汚れた魂を浄化するっ！！」

そもそも地獄の門は罪を犯した魂を焼く場所の入口を意味する  
そして、輪廻転生の考えを組み合わせた術式によって異形の魔物は汚れた魂という考えの元に、異形の魔物に対しての攻撃力は普通の人間に対しての攻撃力の数倍を誇る

周囲の闇を純粋な光で祓うように業火がこの世に顕現する

ゴブリンも、存在を焼く炎に耐えられるはずもなく、灰も残さず闇へ消え去る

その一撃を目の当たりにしたゴブリンは逃げ出そうと二匹揃って後ろを向く

それを見逃すはずもない

既に三角形の加護も失われているゴブリンに手古摺るはずもなく。

二匹のゴブリンの首が飛ぶ

そして、鮮血が噴水のように飛び出る死体が倒れると、戦闘が終わったことを意味していた

山の間からは、太陽が顔を覗かせている

それに呼応して二人の戦士も龍の傍にやって来る

「それでは戻りましょう。

給料は帰った後で払います故、暫し待ってください。  
では、行きましょう」

暗殺者の後ろを追走するように、筋肉達磨ものそりと動く

二人とも人外の速さで走りだしたその後ろを着いて行くように走る

筋肉達磨は一人だけ、ぽつりと口を開く

「筋肉ダンスを布教しようと思う」

「勝手にしてろ！」

ついつい突っ込みを入れるが、虚しい努力であった

**第十二話 異形の魔物と激突する時を刻む物語（後書き）**

今回は短いです

感想評価まってます

### 第十三話 秘密結社との邂逅を刻む物語（前書き）

遅くなりました！

今回も長いと思います

感想評価が上がれば作者はわふーとテンションが上がります

### 第十三話 秘密結社との邂逅を刻む物語

街に戻ると、朝日は昇りきっていた。

暗い闇を明るい光で照らす太陽を背に受けて街を歩く青年のポケットには金が大量に入っていた。

それに比例して、彼の表情も朗らかで幸運そうな表情だった。

その背中をじっと見ている奴が居た。

そいつはどうやら女のようなのだが、どうにも雰囲気や周囲と毛色が違う。

彼もそれには気付いている。

気付いているが、めんどくさいから放っているだけだ。

…が、彼も人間だ。

自分の後ろを粘着質に付きまとわれてはウザったらしくなる。

（この後ろに付いて来る奴誰だ！ちょっと来い！表出る！

責任者呼べ！シェフを呼べ！……ふう、まずは取っ捕まえるか）

どうにもやり辛いが、自分の命がかかっている時点で甘さを切り捨てている。

眼は鋭くなっており、脳も戦闘用に切り替わっている。

後ろでこそそと自分をつけ回している小娘との距離は五十メートル程、次の角を曲がったところで仕留める。

そう決意してから、やっぱり仕留めるのはやめよう考える。

（絶対殺さない。怪我也させない。するのは一つ、動きを止める）

結局、甘い人間なのは否定できないが、それでも、動きは止めない。

ふつと角を曲がる。

自然な足取りで曲がったら、そこに人は誰一人居なかった。  
そこにあるのは無機質な風と戦場の空気だけだった。

「ちっ！既に此処は決められた場所だったてか！」

直ぐに先ほど龍の後ろに付いていた女が出てくる。

龍と同年代の女性…紫色の髪をポニーにした強気そうな女性だ

「こういうのは好きじゃないんだけど…まあ、貴方をこっちに引き入れるにはこれしか無いっぽいしね」

「こっちって…お前…俺は男だぞ？」

げんなりとした顔で興ざめだと言わんばかりの最低な顔をして龍がこの世に絶望したよという声色で見ず知らずの女性にあらぬ疑いをかける。

「知ってるわよ！——ッこのっ！！」

それがどうやら彼女の逆鱗に触れてしまったようだ。  
瞬く間に彼女の顔は真っ赤に燃え上がり、彼女の手の平からは比例するように膨大な赤色の魔力が蓄えられた。

「——っ！おまつ！それはまずいぞ——！」

「うる——さいっ!!」

そして、最早彼の魔術の力量では太刀打ち出来ない魔力弾が放たれた。

「くそっ！耐久<sup>ナウシス</sup>、停止<sup>イス</sup>、防御<sup>エイワス</sup>——ッ」

よって、最初は魔力弾の威力を減衰させる。

その目的は達せられ、無事に魔力弾はぎりぎりのところで弾くことに成功する。

だが、次の魔力弾が間髪置かずに自分の懷に飛び込んでくるのを見て

（終わったな）

と実感するまで、タイムラグは僅かだった。

ドゴッ！

人体に物質が当たったときの音としては、最上級に不味い音だったが、彼は意識を手放さなかった。

それに気付かず、少女は近づいてくる。  
無防備で。

まあ、ここからの眺めはずいぶんと綺麗な景色であった。

「ブハッ！」

青年の精神力は想像以上に弱かったようだ。

「動いた！つてか鼻血が出てるって……………」

キュピーン！

少女が事実気付くまでにはそう時間を要さなかった。

side 威風

「フルンデインは何がしたかったんだ？」

「ふむ…それは知らんな」

闇夜を紅蓮の炎や冷酷な氷が照らす中に男が二人、背中合わせに話していた。

「というかフルンデインは何処行つた？聖堂との三回目の衝突から姿が見えなくなつたんだが」

「ふむ…大方、アメリカの方の救援に行ってるんだろ？  
あつちは聖堂の手合いが多いからな」

「じゃあ、僕達もそつちに行くか？」

「ふむ…ゴーレムの材料を確保してから私は行こう」

「右手のルーンを起動…起きろ。」

…ああ、そうした方がいいな。  
君のゴーレムはぼろぼろすぎる」

いつの間にかのそりと出てきた無機質な巨体を見上げて威風は周囲に集まってきた魔術師を一蹴する準備を始める。  
その輝きがより一層増す。

「おい！もしかして…あれは論道じゃないのか！」

「まじかよ！…くそっ！《神よ、何故私を見捨てたのですか？》詠  
唱完了。神の息吹！」  
ゴッドブレス

それに気付いた神父たちは慌てて詠唱を完了させるが、いかせん技  
術が足りない。

拙い魔術で論道の魔術を止められるわけもなく。

「冥土の土産だ。」

お前たちの主の一撃で死ぬ。  
ゴッドブレス  
神の息吹」

圧倒的な魔力の奔流と共に、正しく神の息吹が神父を襲う。

蹂躪が終わったその場所には、最早命の息吹が吹き返すことはなかった。

s i d e o u t

此処は何処ぞの秘密結社の拠点の一つ。

その場所の中で、数人の影と、中央に座っている人影が居た。

「うお！ちよっ！アーーーーーー！」

中央の人影は奇声を上げて起きる。

残念ながら周囲の人達は無反応で中央の人影：文刻龍に視線をやる。

「起きたみたいだな。つたく、リサがあんな事乱暴なことやるからじゃねえか」

最初に言葉を発したのは金髪で髪を下ろした青年だった。

おそらく、龍と同じぐらいの歳だろう、と判断するがそんな事は気にしないで今度は先ほど龍をボコボコにした少女が言葉を発する。

「五月蠅いわね！こっちはこいつに侮辱されたのよ！別に制裁の一つや二つ目を瞑りなさいよ！」

「はいはい。」

ガルウィン、事情の説明をしてやってくれ。

俺はこの暴れ馬を鎮めるからよ。

ほうれ、ドウドウ」

「私は馬じゃないわよ！」

「知ってるけど？」

「キーツ！馬鹿にして！！！」

「ガルウィン…だっけ、あいつらは？」

「魔術結社…《黎明の瞬間<sup>とき</sup>》の変態だ。

まあ、魔術と言ったか？その腕は折り紙付きらしいがな」

少々気苦労が過ぎる大人…ガルウィンは溜息交じりに言葉を発した。彼の体格はがっしりとしており、肉体派の雰囲気醸し出していた。

「お前は魔術を知らないのか？」

「魔術という正体は知らん…最も、それは誰もが求めるものらしいがな、私には関係の無いことだ。

私は唯、この国を憂うからこの結社に入った」

そこまで言つと一旦区切る。

ガルウィンはさっきまで暴れていた二人の視線を投げる。

二人もそれに気付いたのか、真剣な目になる

「王の息子である青年は、この国を壊すつもりだ」

そして、衝撃的な事実を無然とした顔で言い放った。

## 第十四話 結社の实力を見る時を刻む物語

「なっ！なんだってー！！」

《黎明の瞬間》の拠点に龍の叫び声が響き渡る。

もちろん、リサと金髪の青年…オルドは耳を塞いでいる。

しかし、ガルウィンは意に関せずと涼しい顔で言葉を続ける。

「だが、それはあくまで仮定の事だ。

そういう情報を手に入れた私たちはこうして集まっている…といっても殆どが同じ村の出身だが」

「それで、ユースティツアが貴方のことを話してくれたから私は貴方を勧誘しに来たの」

「ユースティツアを知ってるのか！？」

「ついでに言うのだ。ユーは仲間だ」

オルドが補足説明を入れて龍を宥めているとリサが口を開く。

「ユースティツアがその情報をくれたの。

どうしてこんな事を言ってるのかはね…私たちはこの国を愛している。

この大陸の国の中で一番好き…だから、王様の独断で国を壊させなんかはしないわ。

この国に殉じるために、私たちは此处にいる。

貴方も殉じろとは言わない…でも、私たちに力を貸して欲しいの」

そこで一回言葉を区切る。

そして、真剣なまなざしで此方を見る。

「お願い。

貴方の力が必要な。

私たちにできることなら何でもやるから」

うつすらと瞳に涙を浮かべて、未だ少女の面影を残している女性は  
唯、龍を真っ直ぐ見つめていた。

「…わかった。「本当っ!？」でも条件がある」

龍は手を伸ばし、指を三本立てる。

「一つ、俺の世界に戻る手助けをしてくれ。

二つ、命は賭けない。もし俺が戻れば君たちが助かるなら戻るけど、  
その代わり俺が必ず死ぬ状況だったら決して戻らない。

三つ…オールドだけど…口調が被ってる。変えてくれ」

(正直言って三つ目は要らないけど、この場所に溶け込むためには  
硬いことばかり言っていると駄目だよな…)

相変わらずガルウインは「何か」を求め、それに苦悩する求道者の  
様な顔で此方を見ている。

リサは其れぐらいたったら大丈夫という顔で首を縦に振る。

オールドはという龍にゴキブリの様にかさかさと言いつり回って此方  
に来るが当然のように龍は逃げる。

だが、オールドの速さは異常であった。

あっという間に龍に追いつき、両手で龍の足を固定して口を開く。  
オールド

「口調を変えろって…どうすればいいんだ!？」

先の条件の中でそんなことを言ったな、と思い出しながら龍は考えを口にした

「それなら既に考えてあるぜ!

それはだな…ずばり!」「ぜよ」をつけるんだ!」

びしつと指を一本立てて指差す龍を見つめながらオルドは口を開く。

「分かった…ぜよ?」

「そうそう、そんな感じだ」

新たな口調が決まり、オルドが困惑しながらも律儀に口調を直す中  
リサが口を開く。

「オルドの口調も決まったことだし、今回は此処迄にしましょう。  
あくまで国にこの動きを見つかったら駄目だからね?」

「ああ、分かってる。だけど、此処は何処だ?」

「それについては答えられないわ。

信用してないわけじゃないんだけど、貴方は魔力抵抗の兆しが全く  
ないわ。

それじゃ、駄目」

(…まさか! 魔術抵抗の低さが此処に来て仇となったか! って儀礼  
用の剣はどうした! おい! 俺! どうしたんだ! !)

くねくねと頭を抱えて悶えている龍を無視してリサが言葉が続ける。

「まあ、こちらから何時も接触するから、よろしくね  
じゃあ、ガルウィン。」

殺って」

「殺ってって何をだあ！おい！ガルウィン…さん？なんか腕からどう仕様も無い魔力が溢れてまふよ？お前魔術が使えないんじゃない！」

驚愕を顔にする龍にオルドが説明を加える。

「ガルウィンは無意識的な魔術師だぜよ。」

半人前の、特化型魔術師見たいな感じだぜよ。

まあ…眠ってくれぜよ」

最終的にオルドも眠れと言ったわけで、龍は更に勘違いを深くする。

「眠れて！あれ？もしかして文刻龍さんは此处で終わり？仲間になって一時間弱で終りになる訳！？」

「往生が悪いな。龍。」

武人だったら潔く眠れ（意味としては気絶しろ）」

「ぎゃあああああつす！！死ぬうううううう！！助けて！ユー  
ステイツァ！」

「グッドラック！」

最後にオルドのニヤけた笑顔を眼に焼き付けて、龍の意識はゴスっという鈍い音と共に闇に沈んでいった。

（さよなら…師匠）

結局勘違いしたまま、ガルウィンに担がれて拠点の後にした。拠点から出ると、背景には何一つ物がなない砂漠であった。

360°。見回しても何一つ無かった

## 第十四話 結社の實力を見る時を刻む物語（後書き）

短いですが、すんまそーん

まあ、この小説を見てくれる神様が居ましたら評価を下され  
お願いしますw

第十五話 日常編〜固定タイトルに嫌気が差した〜（前書き）

サブタイ通りです

ギャグたくさん入れたんで…評価感想待ってます！

## 第十五話 日常編／固定タイトルに嫌気が差した

「痛てえ…ガルウインの野郎…手加減すらないってどういう事だよ…」

青年が歩く景色は昨日の昼にダイブした街であつた。

その中で龍は先ほど殴られた首筋をさすりながら恨み言を口にするが、表情は軽かった。

（まあ、なんにせよ。元の世界に戻るための手段を捜す手段は見つけた訳だ…これは一歩前進って事だよな）

歩く速度は周囲の人とは変わらない。

だが、いつの間にか出てきたのかユースティアが隣に存在していた。

「…お前かよ…で？なんのようだよ」

「いえいえ、どうやら《黎明の瞬間》にも無事接触出来たようですね。

唯、それを確認しに来ただけですよ」

「本当にかよ…まあいいや、質問なんだけど、いいか？」

ゆつくりと、街中の景色を見やりながら、ユースティアは了承の意を込めて首を縦に振る。

「あいつら三人の得意魔術を覚えてくれないか？」

（魔術は魔術師にとって生命線。教えてくれなくても仕様がな  
い。その時は本人に聞けばいいしな）

勝手に納得してこれはいい考えだと自画自賛をしているとユース  
テイツアが口を開く。

「そうですね…まあ、いいでしょう。」

マジックウェポンメイカー

まずは、リサですが、礼装創造が得意分野といますでしょうか。  
礼装を作ることなら彼女の右にでるものは居ないでしょう。

なので戦闘には向いてませんね」

ずーんと龍の肩が黒いものに包まれる。

（非戦闘員に俺はボコボコにされたのかよ…）

暗くなっている龍だが、それを励ますようにユーステイツアが再度  
口を開く。

「ですが、戦闘はからっきしという訳ではありませんね。  
オールドからすこしばかり攻撃魔術を習っていますから」

（よしっ！）

既に魔術師の誇りの欠片すら無くなっている龍だが、自身はそんな  
事は気付いていない。

「オールドと言いますと、まあ、攻撃特化の魔術師ですね。  
なんといっても眼を見張るものといえば超高火力の魔弾の雨と言

まずでしょうか

アレを防げる人なんて居ませんよ。

で、ガルウインは身体強化と、回復魔術ですかね…まあ、無意識的な魔術なので他人には出来ませんが」

そこで話を終わらせる。

これ以上は話せない、と言外に告げている。

それを察してか、龍はそれ以上追求はしなかった。

## 2

コースティツアと別れてから10分程、食事を終えた龍はまたもや散策をしていた。

（というか、ブラジルだと思ってダイブしたところが異世界で、昨日の夜に魔物を殺して、で拳句の果てに秘密結社と邂逅って…出来すぎじゃねえか？）

彼自身、あまり気にしたところで如何しようもないものだが、それでも気になる。

考え事に夢中になっていた龍は前方への注意を怠っていた。

まあ、そうすると人とぶつかるのは道理。

ドンッ！

「あっ！すいません」

最初に口を開いたのは少女であつた。  
それにつられて龍も謝罪の念を口にした。

「ああ、すいません。俺が前方の注意を怠っていたから」

「いえいえ、貴方は悪くないですよ」

「そうですか、それじゃ」

「なんて非情な御方ですか！」

「やっぱりそうですよね」

「分かつてやるんですか！もう人を信じられなくなります！」

「それでも、君は信じるんだ…」

「確定ですか！最早此処迄失礼な人に出会つた事は有りません！」

「そうですよね」

「自分でも分かつてた！？」

流石にやり過ぎたと思ったのか、龍も巫山戯るのをやめる。

「うん、本当にごめんね」

「もう後戻りは出来ませんよ！さようなら！失礼な男性さん！」

「龍」

「もう後戻りはできませんよ！さようなら！失礼な龍さん！」

「………えっ！竜って…ドラゴン？…ちょっと、あの子幻覚が見えてるのかしら」「……」

町人が耳聴く聞き取って火に油を注いだ。

「貴方のせいで頭がおかしい人になったじゃないですか！」

「俺もだから大丈夫だよ」

（ダイブ事件とか…）

「そうですか…じゃあ安心ですね…って安心じゃない！むしろあと一歩で崖から落ちる危機感です！」

「じゃあね」

「まさかの此処で会話を終わらせるのですか！」

「料金を戴きます」

「既に労働レベル！」

「貴方を戴きます」

「変態発言！」

「もう要りません」

「あげるとも言っていないです！」

ゼーゼーと息を荒らげて目の前の少女は龍のボケを全て突っ込む。

「…ナイスツツコミだ！」

「ナイスボケですね」

がしつと握手を二人がする。

周囲には既に不審者（男性と少女）がなんかしでかそうとしてる位の認識が芽生えていた。

「俺の名前は文刻龍だ…お前の名前は？」

「私の名前はリークロードンです…リンと呼んでくださいな」

「リン…だな…わかった。まあ、機会があつたらまた会おうぜ」

「ハイなですね」

「…キャラがブレ過ぎだろ」

「なんか言ったのですか？」

「言ってますんよ？」

「無駄口叩いてないでさっさと帰れ」

「それが少女の言うことか！」

「ではでは」

「変なタイミングで話を切られた！」

「てか既に居なくなってた！」

少女は既に居なくなっていた。

あるのは町民の警戒の眼差しと一人で突っ込んだ虚しい空虚感だけであつた。

第十六話 ええい！話が進まぬぞ！作者は何をしてるんだ！（前書き）

作者は地震に怯えています。

第十六話 ええい！話が進まぬぞ！作者は何をしてるんだ！

「親父！この串一本貰うよ！」

「あいよ〜おまけだ。もう一本持つてきな〜」

「おっ！サンキュー！」

「毎度あり〜」

愛想のいい親父の声を背中に受けて金を置いて店を後にする。

そして、おまけで貰った肉の串を隣に待ち構えていたリサに渡す。

「ほいつ」

「あらっ、気が利くじゃないの」

「別に勝ってやるつもりじゃなかったけどな…まあ、親父に感謝しろよ」

「親父〜ありがとね〜」

「すげえ素直だよな、お前」

ジト目で隣で肉を頬張っているリサを見るが、可愛らしい笑顔でこちらを見るだけだ。

「ったく。で、何のようだよ」

時刻は昼過ぎ。

既に日付は変わっており、この世界に来て三日目となる。

だが、龍本人としては既に一ヶ月は過ぎているような感覚だ。

「別に、街で散策してたらあんたが居たから来てやっただけよ。決してあんたに会いに来たわけじゃないんだからね」

「そうか、じゃあな」

「もう少し話そうと思う気持ちは無いわけ!？」

「あれ？これデジャヴ？」

「何がよ!」

「分かった分かった。じゃあ、街を見て回るか」

追求から逃れようと投げやりとその言葉を発した瞬間。  
リサの顔が真っ赤になる。

「えっ…いや、それは…その…デートってやつ？」

「いいえ、貴女から逃げたいから街を歩いてそのうち巻いてやろう  
と思つての言葉です」

真顔で本当の事を言ってやったらリサが消えた。

「ありっ？やっちゃったか…」

これは探すしかねえよな」

流石にリサを傷つけた位の認識はある。

そして、傷つけた女性を放って遊ぶほど軽薄な性格ではないと龍は思う。

「おい、リサ。悪かったから……出てこいやー!!」

早速、消え去ったりリサの搜索を始めることにした。

2

side 通常世界

「おい！その負傷者は下がれ！聖堂側も一度下がってるぞ！」

「ぐっ！痛てえ！痛てえぞ！」

「大丈夫だ！問題ない！」

「聖堂の第二波が迫ってるぞ！対神秘術式を張って迎撃に移れ！」

「隊長！聖堂に動きが見えました！どうやら大規模術式の起動のようです！数は200程です！」

「そうか。まあ、動いたら術式を組め。大方召喚術式だ。神話に纏わる召喚獣の逆算と解体の準備をしとけ」

「了解！」

「隊長！聖堂が動きました！丘の向こうから龍が出てきます！」

「ちっ！洒落せえ！あっちの龍つつたら神の使い魔だろうが！だつたら龍の属性をモロに入ってる筈だろうが！」

この世には法則があるんだよ！神秘はより強い神秘に消されるんだ！それは龍も同じだ！龍の因子が強い礼装を出せ！

礼装の名前はアーサー王伝説の、龍導く勝利の剣だ！エクスカリバー！気張って行けよ！」

「了解しました」

慌ただしく動く戦場の中で聖堂の召喚獣に対抗しようと此方も大規模術式を展開する。

「龍の因子で導くぞ！本物の宝具を出そうとするなよ！あくまでレプリカだ！」

「OK！」

50人程で大きな魔方陣を展開してエクスカリバーを取り出す準備

をする。

既に龍は直ぐそこまで迫っている。

「ヒュース隊長！前衛の約半数が龍によって死亡！どうしますか！」

「ええい！聖堂の龍は化物か！」

「おいおい、ヒュース。思考を止めるなよ。動け。足掻け。すればなんとかなるかも知れないだろ」

ヒュースの傍にずっと佇んでいた青年が思い口を開く。

「だったらお前にはいい考えがあるのか！？なあ、シュトラウドさんよ！」

「いい考えではなくて悪い情報だ。龍の上にひとりだけ人間が乗ってるぜ。」

おい、ありゃ、ドレークの末裔じゃねえか？…終わったな、俺ら」

「神への反逆者の末裔が神の子羊の真似かよ！…おめえら！エクスカリバーを放ったら撤退だ！後続の奴らと合流して迎え撃つ！」

「……了解！……」

「シュト！ロンドーの弟子は居ないのか！？」

「聖堂の方から危険人物として手配中らしいぜ。当の本人は失踪中だけだな」

「頼むから、生きてくれよ？ ロンドーさんが地球を壊すかも知れねえ」

「冗談に聞こえないのはロンドーさんの美徳じゃないのか？」

「隊長！ 副隊長！ <sup>ドラクーン</sup> 龍騎士が襲来してきます！ 撤退してください！」

「あいよ」

「急げ、死にたくないだろーが」

撤退の荷物を纏めているシュトが手を止めてぼやく。

「大航海時代の英雄の末裔ね…」

それに律儀に反応するのは幼馴染の所以だろうか。

「なんだ？ 気になることがあるのか？」

「いや、この決断が後悔のないものかと思ってな…クスリッ」

「おい、誰がこのクソやろうを龍騎士の餌にしてやれ！」

夜は長い。

月は満月。

既に、8時間が経過して尚、夜は明けなかった

第十六話 ええい！話が進まぬぞ！作者は何をしてるんだ！（後書き）

この地震での死亡者に哀悼の意を此処に示します

## ここらでちよつと登場人物紹介3（前書き）

結社のメンバー紹介です

## ここらでちょっと登場人物紹介3

リサ

属性

土・水・有

礼装・霊装

彼女の創作物全てが礼装・霊装として機能している。

余談だが、礼装と霊装の違いは、礼装が武器、霊装が万物に干渉する物体・又は自立型生物の名称

礼装造りの腕は右に並ぶものは居ない。

性格はツンデレ。

クリエイトワールド

得意魔術は万物創造と魔弾による攻撃魔術。

この作品でのヒロイン的な存在。

容姿はリトバスの三枝葉留佳のポニーテール

…ヒロインだすのが遅いのは許してください。

オールド

属性

雷・地・炎・水・風・虚数

礼装・霊装

栄光掴む巨人の手 ミニニョルフルゲ

魔術ののエキスパート。

ふざけた口調（龍がそうさせたが）だが黎明の瞬間の中では最強の魔術師。

特筆するべきは、魔弾の豪雨とも言える一斉掃射。

しかも大規模魔術の展開が早く、個人で運営できるほど技量が高い。属性はほぼ全てをカバーしており、接近戦も出来る変態。

容姿はとある魔術の土御門の髪が立ってないバージョン。

サングラスもたまに掛ける。

ガルウィン

属性

水

礼装・霊装

一己の拳は正義に尽くす《ガルウィン》

性格は厳格で公明正大。  
接近戦のエキスパート。

何時も悩みがあるように見える表情だが、別に悩んでいない。  
時たま悩むことがあるがそれは二人のせい。

容姿は空の境界の荒耶宗蓮みたいな感じ。

己の名前を冠する礼装を持つてるヤバい奴。

効果は己の体の強化と潜在能力を100%引き出す。

単純だがガルウィンが使うと最早人じゃない。

リークロードン

属性

風

実は魔術師。

容姿はクドみたいな感じ。

残念ながら得意魔術はない。

これ以上はネタバレの為規制

第十七話 昼間は働いて溜まるか！ニート？いいえ、夜に働いていますもの

「って、リサは何処に居るんだ？」

砂埃とともに景色を歪める正体を龍は知らない。  
これからも知る由は無いだろう。

だが、問題なのはそこじゃない。

「暑いし……リサは何処にいやがるんだ……」

ぐだーっとゾンビの様な足取りでふらふら歩く。  
昼はとうに過ぎ、夕日が沈みかけている。  
されど気温が高いのはいかなる現象故か。

（……………おいこら、もうこれで4周目だぞ。幾ら何でも見つからないわけがないだろ）

はたと足を止める。

そして、頭を冷やす。

スーと視界が明瞭になる。

否、気温が下がり、湿度が消えているのだ。  
さっきまでは気温が高かったのに、と龍は思うが、途端に自分の異変に気づく。

（いつの間に、こんな熱くなってるんだ？）

昨日、寝たときは別に暑苦しくもなかった。  
勿論、昼間もだ。

では、何故今日は暑い？

いや、今日のリサを探し始めてから熱くなったのだ。

要するに、

魔力の循環が乱れ、それが体外に放出され周囲を熱くしているのだ。  
屋気楼も龍の周辺だけ。

このような現象に、龍は見覚えがあつた。

それは、論道師匠の特訓中のことだ。

初めて人を殺した。

生きている人だ。

といつても、既にそいつは人ではない。

死徒だ。

その時に、一度だけ、周囲の熱が上昇した。  
勿論、今回の比ではない。

「なんで、こんな、動転してんだ…」

周囲の草木は全て灰になった。

ひとがた  
人形の太陽と名づけられた程に、表面体温が上昇した。  
皮膚が溶けた。衣服が炭素になった。

「…あれ…一目惚れか」

またも視界が、今度は思考も、明瞭になった。

気付いたのだ。

この現象や、胸の疼き。この焦りの原因を。

「いいや、この世界に望むものなんてないんだ。  
今は、リサを捜す」

それでも断じた。

恋していると気付いても、尚、断じる。

また、街を駆ける。

今度は路地裏も見回る。

既に周囲の熱は失せていた。

s i d e 論道威風

「なあ、君はいつまでそうしているつもりだい？」

「ふむ、近寄ってくる魔術師が居なくなるまでだ」

「それは後数分と見たね」

「ふむ、勝手に予想してる」

紳士の様な格好をした金髪の男性とぼさぼさの髪をした男性がお茶をしている。

場所は少し高くなっている赤色の丘、本来の色は緑だったそれは、今では月の輝きに呼応して赤く燃え上がっている。

上を見ると星が輝いている。

雲が流れ、黎明の時を見せている。

虫の鳴き声が周囲に響く。

鳥の鳴き声がそれに被せるように低く鳴く。

遠くでは自然の喧騒を壊すように響く戦闘の音。

（なんとというか。龍は上手くやっているだろうか…）

その中で呑気に紅茶をすすり、考えを闇夜に向けて投げつける、そうしてから目の前に居る紳士に注意を向ける。

「なあ、もうこないな」

「ふむ、どうやらそのようだ。さて、ゴーレムの材料も揃った、ゴーレムも完成した。

アメリカに向かうでしょうか」

「なんで此处で一息入れたんだおい」

「ふむ、先に向かうか」

「君は歩いていけ。僕はこれで行く」

そう言い放つと歩き始めるアルファズルを横目に見ながら自分の足元に転移の術式を組み上げる。

「じゃあ、君は歩いていけ」

「ふむ、さっさと行け。私はこれから大丈夫だ」

そうやって隣に凶悪な存在を出すゴーレムを叩く。

「強がりがいっまで持つかな……はーっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！」

三流の悪役みたいな声を出して論道が消える。  
それをしっかり見てから。

「ふむ、  
轉移。  
USA」

アルファズルも転移をした

第十七話 昼間は働いて溜まるか！ニート？いいえ、夜に働いていますもの（後

感想・評価を下さい…死にそうw

第十八話 昼間に働いて堪るか！続（前書き）

分けて投稿しました

## 第十八話 昼間に働いて堪るか！続

「げへへ、いい女じゃねえか」

薄暗い路地裏

偶にこういうことはあった。

その悉くを撃破してきたけど、今回だけはどうしようもなかった。

「おいおい、俺らの仲間があつという間に倒したくせに、俺らは倒せないのか？…ああ、そうか、お前も女ってことか！！」

下衆の声が周囲に響き渡る。

何故、魔術でここから逃げ出さないのか。

それは、さっきの不良Bが手にはめている腕輪に原因があった。

霊装、魔力殺し。

シンプルだが、このランクの霊装になると私では手がつけられない。しかもそいつが私に触れてる限り、魔力も作れないわけであって、要するに絶体絶命ということだ。

でも、諦めはしない。

私に手をかける瞬間、必ず隙ができる。

万力のようなこの拘束から逃れる隙を虎視眈々と狙い続ける。

それまで、声一つ上げてたまるか！

私はでかい腕が顔に迫ってきてても、眼を閉じなかった。

見つけた。

漸く見つけた。

場所は路地裏、どうやら拉致られてたみたいだ。  
数は四。

それぐらいだったら！！

結局、最後の最後に眼を閉じてしまった。

（ああ、私はもう…）

その絶望は黒かった。

だが、その絶望を拭き取るように、最初に手を出してきた右腕がぐにやりと曲がった。

それと同時に、腕輪も取れる。

「なにやってんだ、お前ら。こっちは今いらついてんだ。さっさと潰れる！！」

そして、路地裏の入り口から、両目が虹色に輝く龍を見つけた。

ボキッ！！

不良Bの足が折れる音だ。

不良Bは情けなく、痛みで転がる。

それを無視して、龍は此方に歩いて来る。

「なんだてめえ！おまんら、やっちなえ！！」

「「「おう！！」」」

隊長格の不良Bをやられて漸く頭が混乱から解けたのか、他の奴らもそれぞれ、腰にある剣を取り出して龍に向かっていく。だが、龍は冷静だった。

最初に近づいてきた奴らの剣を折り曲げる。

混乱している最初の奴を無視して二人目に接近し、顎を拳で撃ちぬく。

吹っ飛んでいく二人目を横目に見て、怯えている三人目を無視して最初の奴に足払いを掛けて倒す。

そのまま瓦割りの要領で腹に一撃を加えた。

骨が折れる音と胃液がこみ上げる音をBGMに二人目が気絶する。

腰を抜かしている三人目にずっと近づく。

そして、漸く口を開いた。

「差し金は誰だ。あんな腕輪を持つてる奴を見たことがない。後ろにいる奴は誰だ」

三人目の顔が恐怖で引き攣る。

「はやくしろ。こっちは今いらついてんだって言わなかったか？おい」

「あああああ、あの、「砂漠の旅団」っていつやつらにこれを親分が渡されて、こいつをさらえて」

「依頼者の名前は？」

一瞬ためらう素振りを見せた奴だが、意を決したように口を開く。  
「どうやら自分のみのほうが大切のようだ」

「砂漠の旅団の団長のグレイル・ソードです」

## 第十八話 昼間に働いて堪るか！続（後書き）

このごろ評価が上がらない…鬱だ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7807q/>

---

ルーン魔術師の夜

2011年10月8日07時17分発行